

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



老蒙主上士園





秋尾雷音著

國士之主承者

現狀打破青年同盟會
藏版

大正
13.3.24
寄贈



寄贈本

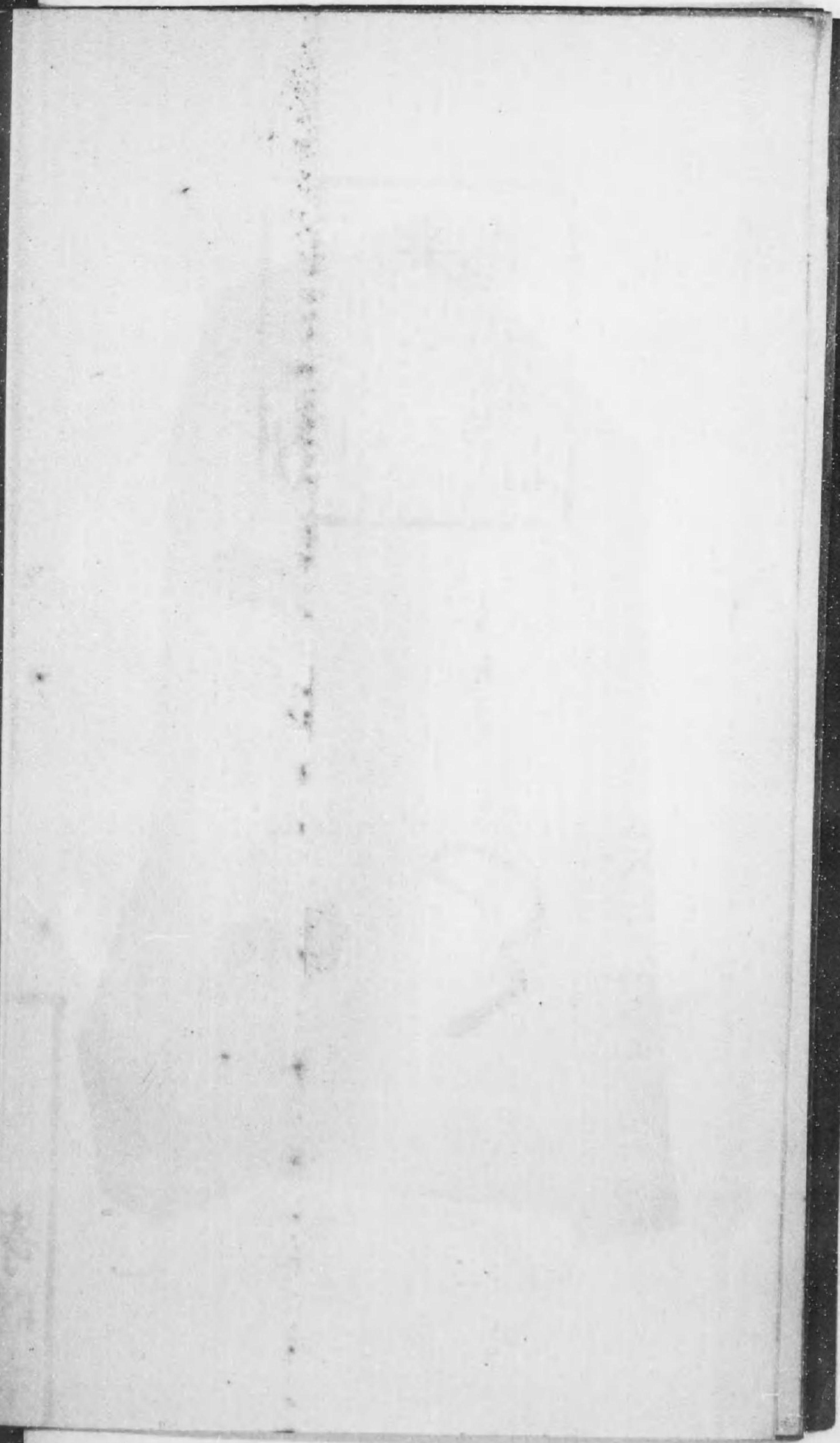
蘇州

蘇州

蘇州

蘇州

蘇州



Small vertical seal on the right side of the page.

草

之

真

草

草堂

真

のねんまは

あまのよたのあめ乃

あまのよたのあめ乃

あまのよたのあめ乃

あまのよたのあめ乃



法庭に立てる元憲兵大尉
甘粕正彦氏と故大杉榮君

523-81

詔勅

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又國民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆遺德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ効果大ニ著レテ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ
輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協贊振作更張ノ時ナリ

振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實効ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智徳ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テハ一己ノ利害ニ偏セヌシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ頼リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名 御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

自序

五官に觸れ、思想の及ぶ處、人間萬事嗟鬱積の世の中なり、北じやと指す方向は實は南にして、赤じやと思ふ物の色は實は青色なり、美味しと思ふ酒の味は辛く暑いと思ふ感じは實はこちらが冷たき故なり、生れたるには死にして、死は即ち生の初めじやと謂ふ、嘘を誠とし、誠を嘘じやと信じて、食つて飲んでたれて行く丈けが人間の本能本分じやと見るのが唯物論なら、人は一代名は末代と考へるのが唯心論者の膽語なるべし。

何が何やらわからぬ處が人生の花と云ふものなり、手品も種がわかつては一向に面白きものにあらざるなり、唯空蟬の世の態は有れども無きが如く、盈つれども虧けたるが如しと云ふが本當の處なるべく、色則是空、空則是色も亦滿更の嘘だとは思へざるなり。

さらばとて人生嘘ばかりにては面白からず嘘から誠を掴み出さんとする處に無限の興味もあるものぞかし。

百にも満たぬ人生を、どう轉んで見たとて大したこともならざるなり、唯恵まれた此の日の本のため、同胞のため一にも働き二にも働き三にも四にも働きて樂しき世のお芝居を見んことこそ賢き人のつとめなるべきを男も女も子供等も皆夫れ／＼に命の限り働いて働いて働いて働いて、そして死ぬ、それが嘘の世の本當の誠と云ふものなり、米の飯とてんたう様は働くものの味方こそすれ、働きもせで徒らにパンの事のみ氣に病みて、由なきことを企むは得てして五體の調子のくるへる人のなすべき仕業なり、長の浮世に短かの命、せめて子や孫のために死に恥さらさで健かに暮し行かんことを望ましけれ。

をばり臨み日頃余が私淑する頭山滿翁の本書上梓に付特に激勵の力籠れる「**其眞**」の書を寄せて光彩を添へられ、又子爵後藤新平閣下が余のため世の人のた

めに一首をたまはる、之を現世々態と思ひ合せて感慨深きこと限りなし、共に巻頭に載せて深き御厚情を感謝す。

大正十三年二月 下浣

著者識す

國士と主義者 目次

第一編 現代思想概論

- 一、番犬の本能は眠らぬものだ……………一
- 二、ズム付思想は時代流行の一風潮……………二
- 三、大和民族の信念は永代不變……………三
- 四、大震災果して慘禍なりしか……………四
- 五、全世界は地震と火山の結晶體……………五
- 六、近眼者流の科學の價值……………七
- 七、日本最古の地震記録……………二一
- 八、世界の火山と日本の火山と學者……………二三
- 九、人類愛の標本人物とサンガー論……………二七

一〇、サンガー主義反駁論……………	一八
一一、呂律不徹底なる農村問題……………	二〇
一二、偉大なる哉大自然の力……………	二三
一三、地軸の變動は懸て大陸を寒帯化する……………	二五
一四、輾開されたる二つのフィルム……………	二七
一五、物質文明は虚偽と矛盾と撞着のみ……………	二九
一六、オペラートに包まれた人生……………	三一
一七、之れぞ大和民族の大信念大哲學……………	三三
一八、西洋文化と汎日本主義との衝突……………	三六
一九、無省察にキヨスの上のフを突く危険……………	三九
二〇、思想に食傷せる國々の悲劇……………	四二
二一、クロボトキンに殺された反逆者……………	四六

二二、趣味本意の婦人問題……………	四九
二三、ウオルストンクラフト女史の女權論……………	五一
二四、新日本婦人と婦道の意義……………	五三
二五、無意義なる男女兩性比較論……………	五四
二六、婦人獨立とビールストルフの勞働第二位說……………	五六
二七、婦人運動と天職……………	五九
二八、男女權の逆轉は人類自滅の基因……………	六一
二九、物質主義は呪咀の世界を創造す……………	六四
三〇、自然科学者と社會觀識の信念……………	六五
三一、無識者の信仰心と有識者の無信仰……………	七〇
三二、敬神思想と其の功德……………	七五
三三、宗教の藝術化と吾人……………	七八

三四、國家の定義と道德…………… 八〇

三五、愛國必とシセロ、シヨウ、ゲーテ…………… 八三

三六、日本現代の爲政者と吾人の覺悟…………… 八五

三七、日本のデモクラシーは義侠的精神にあり…………… 九二

三八、労働者と資本家への提言…………… 九六

三九、同胞七千萬と我が國史の回顧…………… 九八

第二編 主義者論

一、主義に對する吾人の態度…………… 101

二、搾取階級に屬する二人の主義者…………… 101

三、マルクスとクロトはスーブ材料…………… 104

四、主義者の觀たる善と惡…………… 107

五、堺利彦の社會觀…………… 108

六、唯物論者の思想戰…………… 110

七、マルクスは彼れの大恩人…………… 111

八、國法を無視して露命を繋ぐ不埒漢…………… 114

九、生存無競争社會の實現運動…………… 117

一〇、マルサス、マルクス、デアウキンの所論とヒント…………… 119

一一、階級的闘争とプロの學問…………… 123

一二、之れが本當のサカイ主義…………… 125

一三、主義者の仇は奴才黨…………… 127

一四、共產主義と社會主義者の目標…………… 128

一五、大杉の思想と無政府主義…………… 130

一六、第二國民たる者の覺悟…………… 134

六

一七、ビョートルクロボトキンの經歷……………一五

一八、クロの相互扶助論……………一三九

一九、大杉とクロと蟻の社會……………一四

二〇、道德と法の權威……………一四六

二一、法律の缺陷と道德の缺陷……………一四九

二二、賣淫制度は社會の缺陷……………一五一

二三、社會改良は國家觀念の新道德を以てせよ……………一五四

二四、道德心の發達は法律無用……………一五五

二五、物質文明は國史も法も蹂躪す……………一五六

二六、ナシヨナルトレーツの衰亡……………一五九

二七、我が國技は精神鍛練にあり……………一六一

二八、世界の趨勢と保守的思想の必要……………一六二

二九、ミリタリズムと世界各國……………一六五

三〇、米露兩大陸の接續と日本……………一六五

三一、貧弱なる納税人口……………一六九

三二、二大潮流と帝國主義の没興……………一七〇

三三、建設の用意なき主義の實行は有害無益……………一七二

三四、科學の進歩は世界の退歩……………一七四

第三編 日本國體論

一、須らく君國の歴史を復讀せよ……………一七九

二、我が國體と大和民族の發達……………一八〇

三、無窮の御仁慈……………一八三

第四編 國士論

一、思想闘争と國士の出現……………一八七

八

- 二、永代不斷のブル對プロ闘争と吾人……………一八
- 三、萬有の實相は流轉のみ……………一九一
- 四、ムツソリニの主義豹變とマキアベリズム政治……………一九二
- 五、フアスシスチ黨の出現……………一九四
- 六、文豪ダヌンチオと愛國思想……………一九七
- 七、ベニトーの治國要領……………一九九
- 八、剛氣朴訥之れ吾人の本領……………二〇一
- 九、明治維新と大正維新……………二〇三
- 一〇、甘粕事件に臨む吾人の態度……………二〇四
- 一一、甘粕憲兵大尉の經歷……………二〇五
- 一二、大尉の性行及人格……………二〇七
- 一三、國法を犯せる大尉の心情……………二一〇

- 一四、甘粕事件當時の民心……………二二二
- 一五、大事變に悠然なるは大英雄か大馬鹿……………二二六
- 一六、甘粕事件の真相公表……………二二七
- 一七、甘粕大尉の犯罪顛末……………二二九
- 一八、公判廷に於ける大尉の陳述……………二三三
- 一九、慈母の恩愛を棄て一身に罪を負はんとせし大尉の覺悟……………二三五
- 二〇、山田檢察官の論告……………二三八
- 二一、四辯護士の大辯論及判決言渡……………二三〇

第五編 結 論

- 一、結 論……………二三三

■ **概 世 隨 筆** (附録)

- 一、嘘理の派生と軍閥打破の妄想……………一
- 二、臨時議會に於ける後藤と小川と大杉……………二

第一編 現代思想概論

現代思想概論

一、番犬の本能は決して眠らぬものだ

周章てちやいけくない、千古無比の國體、國史を有する、我七千六百萬同胞は悠
然として天の大神勢を洞察し、徐ろに舉措を決せねばならぬ、現代社會に處する
自由と放縱とを間違へてはならない、本能と官能とを混同してはならない、美
的内容と美的外觀とを誤認してはならない、潤達と亂暴とを感違つてはならない、美
順良と柔儒とを誤解してはならない、番犬は寝ても其の夜警の本能は決して眠ら
ぬものだ、植物は寝てもその選擇の本能は眠らないものだ。
古來日本人には日本人たるの本能があり、精神がある筈だ、決して眠つてはな
らない、然るに現代日本の世の態はどうか。

畏れ多くも民心作興の詔勅を拜し、此の御軫念に對し奉りて我が同胞は何を以
て應へ奉らんとはするか、これ敢て秃筆を執つて皇國のために吾人の供に相携へ

て起たんとする以所である。

二

二、ズム付思想は時代流行の風潮

社會主義、共產主義、無政府主義、理想主義、自然主義等、之等總てのズム付思想は十七八世紀頃から二十世紀にかけて著しく進歩せる科學が産んだ副産物であつて、其の時代々々に於ける顯著なる一種流行的の風潮だと看做されて居る、たとへ其處に幾分の理窟や眞理が含まれて居るにしても永い間の時の經過に依り、眞理だとされたことも、合理的だとされた思想も總ては根底から覆される時代が来るであらう、過去の歴史皆然りである。

勿論幾千萬年の未來まで人類が慾の結晶體である限り之等の思想は消滅したり復活したりして周期的に何等かの型式を取つて反覆されるに違ひないそしてそれが時代時代の社會の進化と云ふことに善かれ悪かれ何かんづくの波紋を畫いて行

くことは何人と雖も之を否定し得ない事實である。

三、大和民族の信念は永代不變

だが三千年の歴史を有する大和民族、それは幾種かの種族から成り立つては居るけれども皆一樣に此の永い間の歴史や同化政策に結ばれて同じ言語、同じ風習に育て上げられて來た大和民族の共存共榮の大精神は萬代不變で進むべき理由があらねばならぬ。

此處だ！

我々現代青年の大いに考究を要する點は實に此の一點にあるのである、そして外來輸入のズム付思想や日本傳來の傳統的思想が互に相交錯して波紋を畫いて流れて行く、その流れの中から萬代不變とする或る一大信念を捉へ出して之れを新日本帝國と云ふ大磐石の上に築き上げて行きたいのだ、先づ之れ丈の信念を以

て我々は今度の大地震から授かつた處の一大教訓を透して見た日本現代の社會思想及其の社會の產物たる國士と主義者とに就て考へて見ようと思ふのである。

四、大地震災果して慘禍なりし乎

大正十二年九月一日は關東一帯に亘る大地震があつた、就中大日本帝國の首腦部であり中樞である帝都は大火災を併發して全く烏有灰燼に歸して終つた、實に痛快と云はうか悲惨と云ふか言語に絶する光景を呈した、人々は元録、安政の兩震災にも勝る大慘害であつたと驚き、且つ懼れた、之れをしも災禍と云ふならば實に大きい災禍であつたに違いない、國內の上下を擧げて驚かざるを得なかつただが然し考へて見ると此の地震も初めから有り得ることがあつたまで何等驚嘆すべきものではなかつたのだ、由來日本は極東の大火山國であり大地震國である一年三百六十五日地震の揺らぬ日とてはない、北は北海道の北部から西は九州の

南端に至るまで現に黒煙濛々たる活火山が幾つとなく配列されて居る、時に其の附近に火の雨を降らしたり大爆發を演ずるに何の不審があろうぞ、縱令それがために幾萬の生靈が喪はれ幾十萬の家屋が失はれたとて敢て驚き騒ぐにも當るまい、だが大天災に對して何の訓練もない東京二百七十萬の人々は皆一樣に天を呪詛し、戦き懼れ周章狼狽四方八方へ逃げ迷つた、此の光景を目の當りに見せ付けられた處の地震學の泰斗や地質學の權威だと云はる、諸博士達は呆然として「嗚呼夢、夢！こんな大地震は世界開國以來未だ嘗て其の例を見ない」と云つて居る。

五、全世界は地震と火山の結晶物

そしてそれは地震が搖れたと云ふ事實が悪かつたんであつて何も學者達の罪ではなかつたんだと云ふから面白いのである、だが然し若しも地震其の物が大きい餘であり又人間の様なものでいもあつたならば決してそう云ふ學者達の冤罪其ま

を唯々諾々として甘受する様なことはしなかつたであらう、けれども偉大なる地震君は唯々諾々として何も語らず其の後數十日の間は一日何十回、何百回となく揺ぶつて何物かを人間共に暗示する外何の詭辯も抗辯もせぬ又より以上の怒りも見せず揺るべき處まで揺つて見せた丈けで其處に何の片鐵もこだわりもなかつた、そして淺ましい人間共の根性や伶俐らしい科學者達の本當の生地をばざつくばらんに最も露骨に曝露させて見せて呉れたまでであつたのだ、自然を征服すると云ふ小賢い人間共の力を試して見せた丈けな事であつたのだ、此の現象は獨り日本斗りの専有物ではない、現に今度の大地震と殆んど相前後して、ペルシャのケルマンにも大きいのが揺つて數百の死人を出した、印度のアッサムにも可なり奴が揺つた、スペインの北部ログロニョーにも、シシリー島の南部シリクサにも大地震があつたのである、少しく時は違ふけれども今から恰度十五年前、即ち千九百九年には對岸の桑港にもでつかい奴が揺つて火災保險丈けでもザット二億

六

四千萬圓を支拂つて居る。

六、近眼者流の科學者の價值

だから斯様な現象が今更の問題でないことは誰でもがよく知つて居る筈である、地球の地熱が存在する限り今後何萬年の未來にも幾百千回繰り返へさるゝところか、大體の想像は付く、然るに現今の科學者達は今度の様な地震は世界始まつて以來、例のない大地震であつたと如何にも初めて見て來た様なことを云つて居るのである、元來地球自體が果して科學者の云ふ様に瓦斯體から火の塊りとなり灰燼となり、今日の様な土壤や水を型作つたものであるとするならば、今度の様な地震はホンノお慰みの御愛嬌に揺つて見た迄のこととしか思はれない、此の事が近代の學者達に不明な筈はないのだが乍遺憾、太古時代の人間共の知識は今日の様に、歴史を保存することにまで進んで居なかつたから、書物ばかりを便りに

して来た、近眼者流の學者達には夫れが驚くべき地震であつたと驚嘆するに何の無理もないことであつたらう。

是は極く杜撰なものではあるが、元録の地震に就て隆光大師の護持院日記と云ふのを見るとこんなことが書かれて居る、勿論此の記事が今の學者の讀書眼に映じなかつた筈はないと思ふが参考のため掲げて見る。

即ち、元録十六年十一月廿二日夜八ツ半（今の午前二時半）江戸大地震あり廿九日までには大小の地震繼續し、同日暮六ツ頃（午後六時酉の刻）水戸殿屋敷より出火、折柄大風未申東南の方より吹き松平加州殿屋敷へ火移り、谷中へ飛び後北西風に變り、根生院より天神、明神、本多院、能登守殿屋敷、濱町、日本橋、八丁堀へ移り、又中比西風にて藤堂大學頭殿邊より兩國橋へ焼け抜き終日火消えず朔日日暮に漸く鎮火し、死傷算なく、又小田原地方の被害最も強烈、小田原城並に侍屋敷町は一時に潰れ、出火折柄大風あり、家屋悉く焼失、人の死するもの多

く鎌倉、川崎等に海嘯あり云々、とあつて今度の大地震と略々其の強度も範圍も似寄つたもらしい、忠實な日記帳などを見ると、畿内東海大地震江戸城石垣、櫓諸門破壊すと記されて居る惜いことには、震幅四寸以上と云ふ様なことが書いてないから其の程度を想像する由もないが多分今度の地震に勝るとも決して劣らぬものであつたであらう、之れを今から勘定すると西曆二千三百四十八年、即ち二百三十五年前になる、そこで之を今の學者の云ふ百年目毎に大地震があると云ふ學說に當て倅めて見ると其の後寛政年間即ち第百十八代光格天皇御治世中に大きい奴が來なければならなかつた筈だ、又其の前の百年、天正時代にも大搖れに搖れてなければならぬのだが、一向にさる形跡も見當らない、次で元録から安政まで二百六十六年の間何があつたかを見ると、夫れは富士山の再噴火によつて寶永山が出來た事實があるだけであつて、之も元録の地震から二十二年目の寶永四年十一月二十四日のことだから學者達の百年説は當つて居ないことになる、更に

安政の大地震と云ふのは今から勘定すると六十九年前のことで寶永から見ると百四十二年後であるから、之れも亦當つてゐない、實に今の學者諸先生達の豫言やお説の當らないことには感心せざるを得ないのである。

次で今度の大正大地震から六十九年前の安政大地震に就て當時の地震年代記を見ると安政二年十月二日亥の刻（今の午後十時）激震あり、江戸の民家を初め諸侯邸、神社佛閣等大半壊倒し一時に三十個所より火を發し、炎々天を焦し焼失せしもの十數萬に上り、壓死焼死を遂げたる者十三萬二千四百餘人安政雜記には東西本類寺初め各寺院にて死者二十一萬と記されて居る、此の大地震にて品川砲臺一個は揺り崩され在勤の兵士も大半死傷したり、市中商民の産を失ふもの多かりしかば左記箇所へ救ひ小屋を建つ。

幸橋外、淺草廣小路、深川海邊新田、深川八幡境内、上野山下、下谷廣小路とある、著者はそれより以前に今少し地震らしい地震はなかつたかと調べて見

た、果せるかな古い記録があつた。

七、日本最古の地震記録

今から千五百七年前の第十九代允恭天皇第五年陰曆七月十四日奈良及京都附近の地震で之れは、日本書記や大日本史などにも記されて居る、次は推古天皇第七年四月二十七日で此の時の地震は寧ろ今度のものより大きく又其の範圍も頗る廣く其の後數年間に亘つて筑紫、丹波、三河、遠江、美濃、大隅の諸國に大地震があつたのである、それから類聚國史などを見ると、紀元千四百七十八年即ち今から千百五年前の七月弘仁天皇の御治世に關東の大地震があつた、即ち同國史に七月相模、武藏、下總、常陸、上野、下野國等地震、山崩數里壓死百性不可勝計、八月遣使、其損害甚者加賑恤、とあり京都から救恤使が見へたことか載つて居る、之れが關東最古の地震記録である。

次に建元二年九月にも關東に大地震があつて三代實錄に「相模、武藏爲尤甚、其後五六日震動不止、公私廬舍、一無全者、或地皆陷、道路不通、百姓（人民の意）壓死、不可勝記」とある其後八年を経て房州に大震があり又今から七百三十二年前建久二年三月六日にも鎌倉に大きい奴が揺ぶつたと云ふことが東鑑に載つて居る、其後毎年揺つたものゝ如く文永三年即ち千九百二十六年までは大分永い間地震に脅かれて來た様である、夫れから三十年後、即ち永神元年四月十三日に又々關東に前古無比の大激震があつて鎌倉では二萬の人が死んだと云ふ様なことが帝王編年記や興福寺略年代記に書かれて居る、夫れから次が應永二十六年、永享四年、天正十三年、慶長六年及十年と何れも關東地方に大地震があつた事を見る事が出来るのであるが中就天正十三年及慶長六年の地震は最も強かつたものゝ如くである。

慶長六年十二月十六日上總安房在地震、山崩海中却生山、潮涸三十餘町、翌日

海大鳴潮水俄溢人畜多溺などゝある。

依是觀是に今度の地震は必らずしも世界開闢以來の大地震でなかつた様でもある。

八、世界の火山と日本の火山と學者

火山にした處で世界を見るならば、ヴェスヴィアス、エトナ、キラウエア、ボカベテツル、モントペル、エレバス、ヘクラ、ストロムボリ、ゴブノンラモンガン、イザルコ、クラカトアと云ふ様な著名で吾々の知つて居る奴でも、ザットト二三はある狭い日本丈けにでも無數にある、そして其の熄火山、活火山は不斷大活動をして來て居る、

即ち富士山は延暦十九年三月十四日に噴出し、二度目に寛永四年十一月二十四日に噴いた。

鳥海山は延喜五年八月五日、霧島が天永三年二月三日に噴き、阿蘇が嘉永三年八月十日以來噴き續けて來て居る、現に三原山、淺間山も時々大噴火をやり、近くは櫻島、鳥島なども大噴火をやつた、口碑に従へば琵琶湖、濱名湖なども地震の産物だと云ふから共に注意深く之等の記事を今少し詳細に書き残して呉れた先達があつたならば今時の地震學者達はもう少し啓發され旨を開き得たことであつたらうと思はるる、

富士や淺間に登つた者は其の絶頂より熔岩の流出せる跡を眺め當時の慘狀を追想することが出來よう。

明治大正に掛けても所謂中震と稱する奴が數回揺れて居る、即ち明治二十四年十月二十八日には濃尾の大地震があつて數萬の人が死んだ、大正九年七月七日臺灣にも激震があつて一千有餘の家屋が倒れ、大正十年十二月八日に於ける東京の激震は一週間に亘る水道の斷水を見た、大正十一年十二月八日鳥原にもあつたし

昨年六月には鹿兒島から種ヶ島一帯に掛けても激震があつた、斯くまでに頻發する大地震國に生れ最も手近い自然の研究資料が多々提供されて居るにも不拘日本の地震學者達からは今以てノーベル賞金にさへ有り付いた話も聞かぬとはどうしたものじや。

地震ばかりではない、建築工學の方面に於てもさうだ、今度の如き震災は大化の初めからでも既に幾回もあつたことであり、又將來もあり得ることなのに英國のアーネスト、ウイリアム、モリア博士や米のビヤード博士如きから地震に對する理想的都市建築意見なるものを發表されて唯黙々たる日本の建築學者等の態度を見ると噴飯癖の著者は思はず拳を固めざるを得ないのである、同時に考へる日本の大學などは官吏や博士志願者を作り出す外に大した希望は置けないではないか？ 全くそう云ふ氣持ちにもなつて見るのである。

地震が初期激動の時間に一・九を乗じて其の震源地の距離を推定されたり、地

震計の上下動水平動の交叉線によつて其の方向を知る位の事なら敢て博士先生方を煩はすまでもない、不肖著者にでも出来る藝當なのだ、聞けば大學の地震計は指針が壊れて今度の地震には屁の役にも立たなんだと云ふことである、之れも地震計の罪ではなく、揺れた地震の方が餘つ程悪かつたんだと云ふお説を聞かされたとき、何と心細い事ではないかと全く無條件で感服して終つたのである、中村と云ふ博士が昨年十月の某婦人雜誌に發表されたお話に依ると、地震と云ふものは天氣豫報の様に正確に豫知することは今日の場合殆んど不可能とされて居ることである、實は正確な天氣豫報も亦頼と見ものじやが……

岡田今村などの諸先生方もはい御同様のお説を發表されて居る、實に大きく且つ恐るべきは人間の科學の力ではないか今に地球に『金のタガ』でも箝めることか之等學者達によつて發明されるであらう、こわれぬ様にネ……。

九、人類愛の標本人物とサンガー論

其の偉大なる科學の力が神秘なる大自然をどれ程までに征服し得て來たことか何れ感服の種ならざるはないのである、嘗て早大の阿部磯雄君はサンガーの産兒制限論に就て卓見を某婦人雜誌に發表された、其のお説によると人種の改良上産兒制限は誠に結構な主義である、優生學上から云つても我々は是非斯様な主義に依つて段々と自然を征服せねばならぬ自然を征服すると云ふことは我々人類の權利であると云つて居らるる豪壯の意氣や感ずべきである、人も知る同君は實に有名なクリスチャンであつて人類愛の大なる信仰者の一人なのだ其の御本人の口からして肺病や癩患者の子孫を斷つのは優生學上有益であるから彼等に異性を配偶することは誠に以てよろしくない罪惡だと云ふ義論を拜誦に及び論者が論者丈けに頗る面白く感じたが、之れが自然征服論の第一歩だから恐らく之を讀んだサンガー崇拜論や自然征服論者達は悉く隨喜の涙を霏して有難がつたことであらう、

然し不幸にして著者はサンガーが毛蟲よりも嫌いであつた、そこで早速自分が經營する婦人雜誌(レールウエーウーメンズ)誌上に其のお説の反駁論を掲げて置いたのである、其の要旨を擧ぐると斯うだ、

一〇、サンガー主義反駁論

曰く偉大神秘なる自然は生存に堪へない動植物に對しては自然淘汰の妙法を授けて居る、何を好んで其の小さき手や淺薄な頭腦を以てして自然に遡ふ行爲を眞似る必要があらう、大いに男は女を女は男を愛せねばならぬ、人口の増加に危憂を抱くものがあるならば其の人々は須らく一步を進めて海底の食糧庫を開け、其處には無限の營養品が貯藏され、無限の勞力を要求しつゝあるのである失業に悲む者は行け、行つて汝の科學的才能を以て三千尋下の海底を開拓せよと云つて置いた、又曰く自然は人類自滅の時をも與へつゝある、即ち人類が慾望を放棄する

ことが出来ない限り大なる戦争、小なる争闘が常に行はれて其處にも自然の大淘汰が隨時隨處に行はれる、何を苦しんで人爲的産兒制限の要があらう、植物に就ても見よ成熟不適當の果實は敢て人工を俟つまでもなく、自ら腐朽し種の存續を許されざるにあらすや」と斯ふ云ふ筆法でサンガー説に反對して置いたのである、由來我が大日本帝國は世界に冠たる出生率を有する國柄であつてそれを吾々は光榮にして居る最近の統計に依れば、毎年人口一千人に對し三二、四乃至三三、四人を出生し、死亡率は二五、〇乃至二六、八を示して居る差引計算約三十萬人の人口増加であつて年々横濱或は名古屋市程度の市街が出来る勘定である、之れに次ぐものは彼の獨逸であつて其他の諸外國殊にサンガー主義の實行國などでは如斯旺盛なる増加率を有するものがない、先進文明國だと云はるる佛國、白國及スペインの如きに於ては年々人口の減少を歎きつゝあるのである之等の現象は果して科學萬能主義者やサンガー崇拜論者達に如何なる感と與へたであらうか、文明

は人を殺すと云ふ標語があるが之れは恐らく科學の進歩によつて蒸汽機關が發明され所謂文明の利器は人を殺すものだと言ふ意味であつたらうが、極限するならばサンガーも亦人を殺すものであると言ふことが出來よう、今又地球が一定の壽命を有する活物であるとするならば自然を征服する人類の科學の進歩は一步一步と其の最後の滅亡に向つて接近しつゝあるのではないか換言すれば進歩ではなくして却つて退歩しつゝあるのではないか、古來民族が滅びて國の榮えた例がない、一國の人口の増加は國運の消張に大なる影響を持つものであることは明かである、して見れば極力其の増加を圖らねばならぬ、然るに此のサンガー論の外に尙又近來農村問題を人口増加の問題に結ぶものもあるが其の所論を見ると、

一一、呂律不徹底なる農村問題

呂律不徹底の感がある、曰く、我國の耕作地面積は現在五百八十萬町歩であつ

て、内三百萬町歩は田地であり、他は悉く畑地である、そして農家の總戸數は五百四十六萬戸であるから、一戸平均壹町歩餘に過ぎぬ、然も其の五分の二は資本家階級に屬する大地主の所有であつて、他の五分の三は五反以下の自作小農或は小作農である、而して小農の平均収入を見ると、年三百五十圓見當に過ぎぬ、全國の模範農縣と云はる、廣島縣に於てすら、四百圓内外であるのに支出は四百七十圓に及んで居る、之を以ても人口増加が農家生活上如何に困難な影響を受けつゝあるかゞわかる、従つて農家の子弟が其の業を捨て、都會地に集合し勞働に従事し爲めに農村は荒廢し勞働問題は起つて來る、之れは全く人口増加の結果に外ならぬ、世に五反百性の代名詞が出來たのも農家の困窮を歌つたものであるが之れも大勢已を得ぬと云つて居る、今は農村衰頹の事實のみを論すべきでない如何にすれば之れを救ふべきかが問題であるにも不拘其の具體案をさへ當路に提供することをせずして徒らに呂律不徹底なる議論を敢てするは吾人の取らざる處であ

る、事實現時の農村問題が果してそんな單純な原因から起るものであるとすれば、相當の對應策を講せねばなるまい、即ち未開墾地の開拓に依る耕作地面積の擴張、移民の奨励、長期低利資金の貸出、更に進んでは海底開發も結構であろうし、又米價調節上米の官營なども人口問題解決の第一要提とされねばならぬ、幸なるかな之等のことに就ては既に實行されつゝある處であつて累代の政府は社會主義者等の空理空論を排除すると同時に他面之れが實行を着々と進め來たつて居るのである故に慢然の空論を廢して農務局を獨立せしめ如斯農村振興策があると建言する然も建言の實行には相互に死力を盡すべきだと信する、たゞ農民が困つて居るだけでは問題にならぬ、然し斯くの如くして大自然は人類の行くべき處爲すべき處をなさしめつゝあるのであるが、其の間に於て今度の大地震災が如何なる大教訓を與へたであらうか、以下編を追ふて科學の進歩と人類の關係、人類と自然との因縁、或は科學の力と自然の力と云ふ様な問題に觸れながら所信を述べ

て、今後に處する吾等の堅實にして誤られざる一大信念を發見して見ようと思ふ。

一二、偉大なる哉大自然の力

前に述べ來つた如く、這般の大震災は其の原因が僅かに震幅四寸に足らぬ震動であつたにも不拘、過去五十年間に或る程度まで進歩した科幅の力を基礎として建設された大東京市は金花一朝の夢と化し終つた、そして物質的にも精神的にも帝國の中樞であつたものがたつた三日三晩で全くの廢墟と化し野狐が棲むたと云ふ昔の儘の武藏野ヶ原になつた、世の中は三日見ぬ間の櫻處か實に果ない慘景が目を守るものもなく輾開され「武藏野は月の入るべき山もなく灰より出で、灰にこそ入れ」の換歌にも尙形容し盡せぬ程に夫れ程に廣々と焼けて終つた、そうして其の燒野が原は哲學者にも、教育家にも、政治家にも、宗教家にも、技術家にも、藝術家にも、新聞記者にも、主義者にも官吏にも學生にも商人にも夫れく

深い暗示と偉大な教訓とを與へたことであつた、然して誰にも共通する處の一大教訓は何であつたか、實に「偉大なる哉自然の力よ」

と云ふことであつたらう、此の自然の力には如何に威張つて見ても人類が到底抵抗することが出来ない、同時に其の無限大の力にぶつつかつて見て初めて人類は全く無信念の下に如何に虚偽の渡世を營みつゝあつたかと云ふことを赤裸々に體驗したことであつたらう、幾萬年か幾億萬年か兎に角時の經過に従つて、人知は或る程度まで進むで行くであらう、けれども人知を以てして此の世と大宇宙とを全く没交渉の地位に置くことが許されない限り人類は到底永遠に表面的生命の永續を完ふし得るものではないと云ふことが感ぜられたのである、即ち吾々の想像する處では地球は地震と云ふ恐るべき天災を地核の中に秘めて居る外に地熱の消滅や、地軸の變動、或は大陽熱の減弱、陸地の沈下があり、又は再び猛火に包まれるか、果ても知れぬ天空に游泳しつゝある一大彗星が來つて衝突するか氣候

の變化に依り植物は枯死し同化作用は營まれず空氣は全く炭素のみとなりて人類の棲息を許さないことになるか、之等の天災地變は科學の力を以ては到底豫測することは出来ないのみならず又斯かる事變が絶対に起り得べきものでないと云ふことも斷言し得ない、何れにしても恐るべき天變地異が起つて來るであらう、よし恐るべからざる事變にしても二三千年前に北氷洋附近に棲息した處の巨象や、大風が何時亡びるとなく死滅して化石となり、之れに代ふるに豚や、馴鹿が棲む様になり南洋附近には同じ鳥類でも彼の蜂雀の様な倭少な生物が発生して來て居る様に、嘗て故黒岩涙香氏が譯された「八十萬年後の世界」に見る様な人類の變化があるかも知れない。

一三、地軸の變動は應て大陸を寒帶化す

現に明治四十四年に理學博士木村榮氏は地軸變動の研究上Z項の發見をして、

學界を驚かした、此の地軸の變動は纏て北極及南極が現在の大陸の中心點に移動し來るとき人類の棲息に適する場所は大西洋或は大平洋上となり、現今の五大洲の大半は寒帯となる場合も有り得ることである、斯かる場合に人類は如何なる手段を取り得るであろうか、大宇宙に浮游する太陽系内の諸星は恰も隙間を洩れ旭光に透視せる、微塵にも似た一分子に過ぎぬ、其の微細なる一分子の表面に棲息する人類は之を五億萬、十億萬倍の顯微鏡を以てしても尙且つ發見することは出來ない程の微細の動物である其のアミーパーにも及ばぬ人類は僅かに七千九百哩に過ぎぬ直徑を有する地球の上の五千六百萬方哩に過ぎぬ陸地の上に於て互に肉の戦闘や精神の争闘を續けつゝあるのである、又永遠に續けて行こうとして居るのを見ると誰か「人生一切の努力は唯肉體の健全を計るにあり、肉體の健全は之れ一切の力、一切の成功の本源なり」てふ人生觀を抱き得るものがあるうか、

一四、輾開された二つのフィルム

這般の東京大震災は實に此の間の消息を最も明確に、最も痛烈に其のフィルムを我々の眼前に展開して見せて呉れた、そうして其の中から特に摘録して讀者と共に考へて見たいことは次の様な事實であつたのである、即ち幾多の新聞雜誌等によつて表面の事實だけは既に傳へられたが、其の最も顯著なる第一例は本所區に於ける陸軍被服廠跡の燒死者、二萬五千と其の罹災者の家族、親友其他燒死者生前に最も深い因縁を有した人々の當時に於ける心理状態である、

第二例は無政府主義者の巨頭と稱された、大杉某及其の内縁の妻を絞殺した憲兵大尉甘粕正彦氏の行爲に對する世人の批判である。

人は往々其の身邊に起る處の異狀の事變によつて強い刺戟を感受するときに多く精神異狀を來し昂奮状態に陥る場合が多い、そしてそう云ふ場合には大概の矛

盾も難なく來り踰えることが出来るけれども、其の昂奮も鎮靜し、理性が覺醒した場合には今まで殆んど氣が付かずに飛び越して來た、矛盾をば越え難い障壁として感ずる様になるものである。

吾々は決して昂奮的精神状態に陥ることなく此の二つの實例に就て冷靜に考究して自分自身の階級的立場とその今後に取るべき態度とを正當に理解し置くことは正しく日本國民としての義務であり且つ吾々現代青年の一大義務ではないかと信ずるものである、そこで吾々は此の兩實例に對し

Nichts ist drinnen, Nicht ist draussen,

Denn was inner, das ist au-sen.

で全く白紙主義的虚心坦懷の態度を以て此の中から今日の科學的知識を以て説明し得ない一大信念夫れは全く超自然的の精神の存在と其の生活とに就て考察して見ようと思ふものである。

一五、物質文明は虚偽と矛盾と撞着のみ

第一例に就て稽ふるに、人は肉體を以て單なる自然の繼續として其の生活の意義に就て其の核心を適確に捉ふることが出来ないで、徒らに人間社會の現象を見て以て影の様な客觀的の實在を信じ、物質文明の進歩のみを以て人類一般の幸福を進むるものとし、超自然的の勢力よりも寧ろ自己の力を便らんとし人間そのものを崇拜し、之れを信仰の對象物とした所謂物質至上主義の人々が、人間の智力や科學なるものが到底客觀の世界に於て眞實の生活をなし得ないものであると云ふことを感じたであろう、そうして現世其のものが、如何に矛盾と撞着と虚偽とに包まれて居るかと云ふことをも痛切に見せ付けられたに違いない我々は此處に注目したのである。

彼の多數の燒死者中には、昂奮の極、全く自我の存在や五官の平靜や知識を失

三〇
ひ何等の苦痛をも感ぜずして、安らかに死に就いた人もあつたであろう、又之れと反對に活きることゝ藻掻いて激甚な苦痛と戦ひつゝ、火焰の中に悶死した人もあつたであろう、母は最後まで可愛ゆい愛兒を抱きかたむけ、焼けて死んだ人もあつたであろう、夫婦共々手を握り合つて死んだ人もあつたろう、友人と共に吹きまくる火焰を防ぎつゝ、遂に力及ばずして、共に最後の祈りをして死んだ者もあつたであろう、財布を握り締めたまゝ、死んだ人もあつたであろうが、何れも取りかへしに身寄り縁者の安否を氣遣いながら念佛を唱へ或は題目を誦し、神に祈り佛を拜んだことは生殘者の直話を聞いても明かになつて居る、然るに皆一様に肉は一片の灰となり煙となつた、そして大自然大宇宙に全く合體して科學的或は物質的觀察上から云ふならば瓦斯體となり、固體となり土となつて遠久に一マテリアルとして残つて行つたのである。

更に精神的の方面から見ると夫れは卑近の例として吾々の直感し想像し得ることは、被服廠跡に第二の回向院が建設せられ、祭祀が年忌かが營まれて（恐らくそうなるであろう）永久に罹災者の靈が祀られると云ふことになれば後世の人々は其の祖先が慘禍に會つた當時の事跡を追想して、之れから愛であるとか、情宜であるとか、祖先を崇拜すると云ふ様な精神が新たに萌して來るであろうと云ふことは一應首向し得ることである、即ち感化の上に多くの罹災者は永久に活動して行くことになるのである。

一六、オブラートに包装された人生

以上は死に行ける人々の身上から断定し得る事柄であるが、之れと反對に生き残れるものが死に行ける人々との關係に就ての一考察としては如何に人間が現實の世界のみに眩惑されて來たか、生活慾、生存慾にのみ競争して來て居るかと云ふことを十分に證據立て得たことである。

即ち人間其物から義理も人情も恩愛も又夫等の總ての道德的觀念も全く破壊され人間が作り出した處の法律や宗教や教育によつて養つた心作用の悉くが虚偽のものでそれ等の總てが一大災禍の前には何物もなく何等の權威を持たぬ空虚のものであると云ふ現象を體驗することが出来たのである。

親は最愛の子を捨て、避難した、隣人は他人の自轉車を横領して身を以て遁走した、親友も捨て恩師も見殺にした、愛妻も顧みず命あつての物種とばかり只管我が身の安全を圖ることを忘れなかつた、そして幸ひに危難を免れ得たものは忽ち餓飢身に迫り逃走の道すがら製氷會社の倉庫に侵入して氷の一片を盗み喰らい、焼け残つた酒店の清涼飲料水を掠奪し奪ひ合ひ叩き合つて飲んだ、中には貴金屬店の残灰を漁り驚くべきは死人の懐中を探したものもあつた、無垢の鮮人を撲り殺したのもあつた、乳兒を捨てた女、貞操を賣つた婦女も出た、五倫五常も百日の説法屁一つの價もなく全く一蹴し去られた、人間の性情は斯くして卒直

に赤裸々に何の飾りもなく露出され、淺間敷くも教育、宗教、法律と云ふ様な教化や習慣や風習や善良の秩序乃至規律と云つた様な人間の本能的行爲の總てを押し包む處のオペラートは痕跡さへ見る影もなく、溶けて破れて中からはみ出したものは唯々淺ましい前記の様な行操の事實のみであつた、大天災に遭遇する場合に於ける人間の昂奮は常軌を逸し狂態に陥り、世人の口にする大國民的標度を失つて終つた、就中無稽の流言蜚語に迷つて國法を犯したのも枚擧に遑なく周章狼狽の極景を見せしめた、法律や道德があつてさへ人間の本性は斯くあるべきものだ、若しもそうした本性を押し包む處のオペラートが發明されて居なかつたならば更に悲惨な光景が演ぜられたことであろう、して見れば人間は全く單純なものであり其の思想は實に便りないものであることが明かである、著者は此の單純性を讚美したいのだ、徒らに人心を複雑化する處の總ての思想や制度の存在を排除したい斯う云ふと人類が大古蠻族の時代に還元することを希望するかの如くに

も聞こえようが決してそう云ふ意味ではない、總ての複雑化する處の内外部的
作用が單純化さるゝきに人類の幸福と平和とが此の單純化された精神生活の母
體から新たに生れ出て來ることを信するからである、一切打破、現狀打破の言葉
はよく世間に聞く言葉であるが其の精神は單純化にあることは明かである、仕事
をするにも複雑な思想に妨げられ、一朝一夕に成就すべきでない現時の世態は決
して望ましきことではないのである。

三四

一七、これぞ大和民族の大信念大哲學

筆端は稍々外軌に逸したが兎に角大天災に對して何等の信念もなく訓練もない
罹災者は斯く狂亂の光景を呈したが其の狂亂の中に於て特筆大書し得べきことは
我れを失へる状態に在りながら尙且つ 皇室の安否を氣遣つたことである、帝都
の新聞紙中當時の状況を逸早く號外として報導し得たものは僅かに一二社に過ぎ

なかつたが、九月二日の新聞が日光に御滞在まします、兩陛下と山本内閣成立の
ため宮中に於て親任式を擧げさせられつゝあつた、攝政宮殿下が全く御無難にあ
らせられた旨を報じたときは、避難中の罹災民も救護に奔走せる市民も我れを忘
れて喜こんだ、陸軍省前や上野公園、日比谷さては新宿附近にも其の號外は貼付
された、通行者は此の事を知つて手を合せて號外を拜んだ、思はず兩陛下の萬歳
を叫んだものもあつたのである。

著者は此の光景を見て泣いた、嬉しい泣きに泣いた、斯くてこそ我が日本民族は
永遠無窮に國の礎を失はぬのだ、げに時も思想も遷り變つて行く昨の時も明日に
なれば一日の過去一日の昔になる様に變つて行く、思想に於ても國の東西を問は
ず遷り行く西洋人の哲學などを見てもライプニッツの哲學に對してプラトールの舊
理想主義が起り、此の學派の未流がオイケンの新理想主義を生み出した、如斯幾
變遷を経て殆んど停止する處を知らぬ、社會哲學に於てもマールブルヒ派、シユ

タムラー派など、夫れく異つた學説があつて其の時代くによつてそれが人間の生活と段々交渉を持つ様になつて來て居るが此の先どんな變化を見るであらう、或は全く新たな思想界の説明も生れて來よう在來の有神論、一元論、無神論、二元論、唯物論、唯心論と云ふ様な學説は全く無價値なものになる時代も來るであらう、けれども萬却末代永遠無窮に變らざるものは日本民族の有する皇室を中心とする一哲學的思想であらねばならぬ、其の大信念であらねばならぬのだ、其の單純なる皇室崇拜の思想であらねばならぬのだ、此の事實を目睹して感極まつて泣いたものは獨り著者のみではなかつたのである。

一八、西洋文化と汎日本主義との衝突

或る者は西洋の學問を排斥し或る者は西洋の學問を大いに取り入れねばならぬと論ずる之等は何れ保守主義と進歩主義との争ひに過ぎぬが、近來所謂新らしか

りやは只もう何も彼も西洋のバタ臭い學問を崇拜することが流行して居る、だが考へて見たい、古來歴史を異にし人情風習を異にする西洋の思想、學問の上に表はれた其の西洋思想が二年三年の留學や巡遊位で眞想が確められよう筈はない、夫れがやゝともすると其の表面のみの學術と云ふ様なものが何等考慮なく輸入されて之れに尾や鰭が付けられ其のまゝ日本のものにし様とする風弊が助長され、斯様なことに没頭する人物が一種の惻恰者とされる世の中である、今や日本は五大國の一に伍した、然して此の地位を作り得たものは歐洲文化をよく咀嚼して其の營養を攝取したからではあるが最早今後の文化は日本から今後の平和は日本から初められねばならぬ、英語を學ぶより、日本語を世界語にせねばならぬ、汎日本主義をして全世界を支配せしめねばならぬと主張する者がある、吾々も亦此の意氣が好ましい、之れに對して新らしがり屋は左様な義論は驕慢である、米國の祖先は驕慢で通つた印甸人であつた、彼等は世界の優良人種を以て自ら任じ

た、そうして白人の文明に學び科學に少しの敬意を拂はなかつた、ために今日では殆んど滅亡して終つたではないか、羅馬民族が世界を征服したのは他人種を征服しながら其の人種を自己と同一な自由市民として待遇し、彼等の文明を十分に攝取したからである、希臘の文明も羅馬に入つてから爛熟したが、羅馬人が軍國主義に眩惑し出してから次第に倨傲の性情を馴致したから、萬代不滅とされた羅馬大帝國も遂に滅びた、獨逸も軍國至上主義が破壊に導いたではないか、支那の衰運も中華民國人の自負心の結果である、だから日本青年達は日本古來の歴史や文學などを墨守して居る様では決して夫れが日本の教育の名譽ではない、故に謙虛な垣懐な心持ちで世界の文化を惜しみなく攝取せねばならぬ、そこから新らしいものが生れ出るのでと反對する、だが然し猶太人はどうであるか、唯我獨尊非妥協的の民族であつてよく五千年の孤壘を守つて來て居るではないか、猶太人たるカールマルクスの思想はどうか現代の日本人は如何、吾等は必らずしも西洋文

明の輸入を絶対に排斥するものではないが、今日の日本人は徒らに西洋文化の眞似のみ之れ事とし美味も不美味もゴツチャに攝取し食傷と胃擴張とに苦しめられ引いて政治家も學者も總ての階級の人士も悉くが激烈なる神經衰弱症に陥つて居ることを認めないわけに行かぬ。

一九、無考察にキヨスの上のヲを突く危険

維新の士志達は尊王攘夷の運動に成功した、そうして忽ち尊王開國主義に變つて沈滞の歴史に王政維新と云ふ大手術を施したことは誰も知つて居るが、當時の士志達は全く無病で頑健で眞劍になつて西洋文化を咀嚼することに努めた、此間毫も取捨選擇を誤らなかつた、明治天皇が「智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」と諭へ給ふたことは當時から之をよく奉戴して來た、其の御主旨を誤らなかつた、然るに今日の新らしがり屋に果してそれ丈の準備と覺悟があるであらう

か甚だ疑はざるを得ない、油水相容れない西洋の共産主義、社會主義などの學說がよさそうだと云へば直ちに夫れが國家國民にどんな影響を齎らすであろうかと云ふことは考へ様とはせぬ、不用意にも之を知識慾に飢へて居る若い學生達に無理無態に叩き込むので、そこから大なる危険大なる誤解も起つて来る、日本國民として育て上げられた初等教育の精神も忽ちに叩き壊はされて、光輝ある歴史や、日本の國土さへを疑ふ様になつて来る、此處にも教育の不統一や矛盾撞着が見らるではないか、教育の切り賣りと云ふ奴が見らるゝではないか、恰度夫等の事柄は無計劃無用意にキヨスの上のフ兵を猪突的に敵陣近くに突き込んで行く様なもので、應て味方の陣地が此處から破綻し初め一大危難が押し寄せて来るのである、文明開化を以て誇つた露、佛、獨及支那の現在はどうであるか、日本に於ても近時向ふ見すの無政府主義、共産主義、社會主義者などが簇出する様であるが彼等は殆んど歐米の思想を生嚼りに嚼つて食傷したもので毫も確たる主義上の信念を

持つものではないのである、だから大極の上から見て夫れは決して恐るべきものではないが、苟も素直に育つて來た國民から斯かる不心得な妄動者を出すに至つたことは決して國家のために喜ぶべき現象ではない、同時に其の罪は國民全體が背負はねばならぬ責任ではなからうか、然し此處に注意したいことは日本の主義者なるものは多くは主義其のものを賣文の策略に利用し社會に害毒を流すことを一種の遊戯と心得て居ると云ふことである、而して彼等は獄門に投せられることを最も賣文の有効なる策略とし、我利々々妄者の出版屋などは先を競つて獄裏の主義者と通じ原稿を上値に買ひ取つて來ては進歩した印刷機械によつて忽ち何萬と云ふ毒藥を調製して之を全國に散布する、奇を好む者共は忽ち関を作つて書店に押寄せると云つた有様で社會主義、共産主義を書きさへすれば大低の原稿は飛ぶ様に賣れて内容の如何は問ふ處でなく三版四版と版を重ねたものが尠くはない、之れによつて成金になつたものも多いと云ふことである。

二〇、思想に食傷した國々の悲劇

考へて見たいのは此處だ、之等の主義思想の生産地は主として科學の進歩せる點に於て世界に其の權威を誇つた獨逸ではなかつたか、然るに其の獨逸自身は猛烈なるミリタリズムの政治を敷いた、ミリタリズムも結構だが少しく頑強に過ぎず遂に國を亡ぼした、佛國や米國の如きはデモクラシーの木家本元であつて依然貧富の懸隔が甚だしく乞食も多いのである。夫れが今日では獨逸と反對に軍國主義で押切つて行こうとして居る、露國はどうか、露國には古來虛無黨と稱するものがあつて常に國家を禍して來た、ロマノフ家の没落によつて忽ち國內は亂麻の如く亂れ共產社會主義、無政府主義の讚美者であつた、否其の巨頭と傳へらるゝレーニントロツキーの類によつて莫斯科に露國社會主義聯邦サヴェート共和國と稱する恐ろしく長たらしい變體的の國家が出来上り、無智の勞農及兵卒等を基礎として

「働かざれば食ふことを得ず」と云ふ實に至當の理想的法律の下に資本家階級の擁立に依つて立つた處のケレンスキー内閣を見る見る内に打ち壊して故レーニンが新内閣の首班に据つた、そうして人民評議委員會を作つて行政機關とし、中央執行委員會を設けて立法の府としサヴェート會議を開いて國政を執つて行くと云ふ型式で極力共產主義の實を擧げることが努めたが、矢張り先に立つものは資本金であつた、さしにも強硬な過激主義者であつたトロヤレーニン等も穏和派のチツチエリンやクラシン等に手向ふ能はずしてサヴェート内閣に内紅が起り理想の聯邦に龜裂か這入つた、そして國內には安閑として業に就くものなく忽ち大饑饉に襲はれ、至る處に掠奪が行はれ、人肉の市さへも出來た、そこで對内策として一日も早く此の亂麻の國を世界各國に承認して貰ふことを願つて居た折柄、ゼノアに經濟會議が開かれ露國問題を中心として各國の代表者が一堂に集まつた、露國からもチツチエリンや先頃後藤さんの招きによつて日本にもやつて來た彼のヨツ

フエ等が参加したが結局此の會議は露國にも各國にも何の利益もなく失敗して終つた、次でゼノア會議の延長會議とも見るべきハイグ會議が開かれ露國は金が没しくてたまらず國內改造案と稱して三十二億二千萬金留と云ふ莫大な借款談を持ち出して見たが、不幸英佛の唾み合ひがあつて結局相手にされずオジャンになつて終つた此處で考へたいのは共產主義と稱するものも矢張り最後のドタン場になれば資本金、金に兜を脱かねばならぬこと、今一つは人と人との間に於けると同様に國と國との間にも慾があることである、此の慾がある間は決して眞の平和は望み得ない、たとへ肉彈的戰爭がなくともそこに經濟戰が起るのみならず共產主義も社會主義も結局空想に近いものだと言ふことが充分に了解せらるることである、そこで流石の露國も最近ではどうしても資本主義によつて疲れ果てた國民を救ふ外に方法がなくなつた、共產主義や無政府主義を買ひかぶつた國民は今に及んで無謀な空想を抱いたことに目を覺して來た、同時に斯様な主義思想を以て唯一

の金看板として強力階級の政治機關を斃して搾取主義の少數野心家が無智の國民を詐つて其の政治を行ひ自己の野心を満たした外に國民一般には大なる幸福が得られなかつたことに氣が付いた、と同時に人間社會の幸福の爲に總ての不平等、即ち自然の不平等制度化された不平等、階級化された不平等などを取り除かねばならぬと云ふ理想は全く學者や變態的思想家の寢言かさもなくば、夢物語りに過ぎぬと云ふことが明かになつて來た、そしてそこには嵐の後の静かさで國內安靜に復歸するにしても矢張り以前の通りの國柄を超越することは出來ないものだと言ふことも痛切に直感され出して來たのである、夫れ丈けでも露國に取つては實に大した經驗と收穫を得たと云ふてよろしからう。

よも日本人には彼等の宣傳に乗せられて塗炭の苦るしみを見る様なたわけ者は居るまいテ。

著者は考へる、人間が見て以て最も美とする薔薇にも自己の存在を安全にし種の永續を保護するためには鋭利なる薊が與へられて外來の襲敵を防ぐべく闘争の準備が整へられて居るではないか、多くの動植物皆然りである、故に國家を害し國民に危害を及ぼす處の思想や襲敵に對しては之れに對する思想と軍備とが必要である。軍國主義も軍閥も決して無用の長物視するわけには行かない、唯其の要不要は世界の大勢に順應すべきものでなければならぬと云ふことである。

クロボトキンは蟻の生活状態を見て以て共產主義を發明したと云ふ、然し蟻にも猛烈な闘争性がある、彼等の間に決してクロの目で見れば様な平等無差別や平和が保たれて居るとは言ひ得ないのである、依是觀之必らずしも理想と實際とは一致すべきものではない、寧ろ理想を實現するには其處に大なる危険と不幸とが人間社會の歴史として跡されるに過ぎない場合が多いのである。

共產主義、無政府主義或は社會主義者共の其の主義とする處の宣傳によれば今にも世界の人類からは總ての争闘、ブルとプロの戦ひ階級的の争闘と云ふ様なものが取り除かれ總ての物資が國有に移り、分配が平衡を保つて行く様になれば、其處に平和と人類の幸福が齎らされると云ふのである、事實左様な社會觀を以つて居るのである

クロの「相互扶助論」などは殆んどそうした牡丹餅で頬べたを叩く様なことを書いて居る、然も之れは彼れが若輩の頃の作であつて其の當時の露國民としての思想であつたにも不拘大杉某の如きは好んで之等の書物を耽讀し讚美し、之の思想を我が國の進歩した今日の思想界に取り入れて實現させようと考へて居たものゝ如くである、のみならず彼れ等は之れを以て最も新らしい思想として崇拜し、時に妄想狂的態度にも出ようとして囚人となり獄屋に繋がる、身となつたこともある、然も彼等は之れを以て一種の名譽の如くに心得極力官憲にも抵抗した、そし

てそう云ふ行爲を賣文商略に應用したのである、謂はゞ主義者の看板を掲げて、其の主義を唯一の賣り物にして居た、實にたわいもない職業的主義者であつたのである。

處が一人倍奇を好み新らしい出來事を以て飯の種にして居る出版屋や新聞屋などは彼れを以て日本が産んだ無政府主義者の巨頭であるなど、耶論したり、おだて上げたりする、そこで益々彼れは圖星に乗つて時には亂倫にも人の鼻を横領したることさへある、そうして冷靜なる研究家でなくして一種の無頼の徒と化し終つたかの感があつた、彼れが若しも眞の主義者であつて、眞の平和と人類の幸福とを愛するものであつたならば最後の斷末魔まで戦つた彼の努力と犠牲とを日本民族のために今少しく明瞭な行爲を以て捧げねばならなかつた筈である、若しも彼れが現代の弊風が國家の支配的權力の中心をなす優強階級が弱小民族階級に臨むが如くに恩情主義や協調主義を採つて居ると云ふことが不満であつたとするならば

彼れは主義のためには一時其の優強階級者の地位を取つて自己の所信を實行する處の勇邁心がなければならなかつた筈ではないか、然るに事ここ迄に進み得ずして敢えない最後を遂げたことは彼れのために誠に氣の毒なことであつたのみならず國家としても彼れを改俊に導き得なかつたことは誠に遺憾千萬であつたと云はねばならぬのである。

二二、趣味本意の婦人問題

扱て以上述べ來つた主義思想の外に今一つ我々に提供された問題が残つて居る、それは彼の婦人問題である、婦人問題は其の根本に於て前數節に説いた様な、陽性的ソシアリズムな點は認められない、又其の目的とする處も大いに異つて居るのであるが、之れも亦重に西洋婦人等が其の國有の傳統的婦人觀から超越しようとする所謂新婦人運動の表現であつて、思想變遷の大潮流と見ることが出來よ

う、而して其の問題の論點なり、要求する處は頗る多岐に亘つて居るのである、即ち男女平等論、婦人解放、婦人教育の要求、婦人の經濟的獨立、參政權の獲得と云つた様な内容を有するけれども要は「女子も男子と同様に取扱つて貰いたい」と云ふ頗る陰性的のものに外ならぬ、而して此の問題は女子ばかりの專賣問題かと云ふに決して左様ではない、矢張り男子が混つて一緒になつて騒いで居るのである、然らば此の様な問題は何時頃の產物かと云ふと、決して新らしいものではなく、殆んど想像も付かぬ程舊い時代からあつたもので、夫れが婦人運動として現はれて來たのは十八世紀の中葉からだと言はれて居る、即ち彼のジャン、ジャック、ルーソーが生れて「人間は凡て自由である、平等である、何人も自ら作らざる法律に服従する義務はない」と叫んだことが其の主なる動機となつて古い因襲的道徳に縛られて、永い間鬱屈し來たつた西洋婦人の不平が勃然として破烈し擡頭して、自由平等の叫びとなつたのだと云はれて居る。

二三、ウオルストンクラフト女史と女權論

勿論斯く婦人運動が具體化したことは時の文藝復興或は科學の發達等による思想の變遷や生活上の恐威或は婦人教育の進歩と云ふ様なことが大いに婦人の覺醒を促したことは何人も否定し難い處であつて、此の様な問題が多大の動機を與へ婦人運動の具體的動機を作り出したのは西曆千七百九十八年に於ける有名な佛蘭西大革命であつて、佛蘭西革命は世界史上に一新紀元を劃したばかりでなく、婦人問題に於ても亦一新曙光を投げたと稱されて居る、爾後婦人問題は北米合衆國に波及し遂に東洋にも及んだが、英國の如きは千八百八十三年には顯著なる婦人運動が行はれたのである、斯くして男子專有の職業が婦人の爲めに門戸を開放せられ女子と男子とか職業の上に對立し得るものと看做されて來たことは總て夫れが社會的に政治的に或は經濟的に看過すべからざる一問題となつて來たのである

る、爾來世界の趨勢は理に於て婦人問題の根本的要求は或る程度まで之を是認せねばならぬことになつて來たが、最近に於ける婦人運動が佛蘭西革命當時に於ける彼のウオルストンクラフト女史の主張即ち「妻に對する夫の神權と夫に對する妻の絶對服従とは共に天意に反す男女は社會的地位に於ても道德に於ても何等の差違あるべからず」と云ふ旺んなる女權擁護の叫びが現今の如き參政權運動などに深い曰く因念を繋いで來て居ることは確かである、斯く説き來ると婦人運動は單に婦人の地位を擁護する思想表現の運動のみを以て婦人運動の大眼目の如くにも見ゆるであらうが決してそう斗りとは限らない、他面には貧民救護、兒童教育改善、禁酒運動或は賣淫制度の取締りと云つた様な直接社會改善の運動にも手を染めて來て居るのであつて、彼のクリミア戰爭當時一世の女傑として知られた、ナイチンゲール女史が赤十字社を創設した如きは實に世界的大運動の産物であるのである。

二四、新日本婦人と婦道の意義

だか然し考へて見たいことは我國の婦人運動である、我國の婦人運動は斯くまで徹底した信念があり抱負があつて在來の婦道から超越して婦人の新生面を開拓し様とするものであるか否かと云ふことである、稍ともすれば單に男子に抵抗せんがために起りそこに日本婦人としての理解と信念とを缺いて居る様な傾向が見えることは頗る遺憾である。

勿論我々は鎖國思想に囚はれてはならない、日本傳來の婦道一天張りて以て延びんとする婦人の思想を壓迫してはならない、極力婦人の立場を同情し婦人の要求に耳を傾け、時に大いに婦人の味方として婦人運動の達成に援助を與へねばならぬが、クラフトやグウジ女史の如き男女平等論或は女權擴張論と云ふ様な所謂陽性的の運動に對しては直ちに之れに賛否の意を表し能はぬものである、眞日本

の婦人の道徳上の見地からして彼等の所論を眺めるならばそこには大なる缺陷があることを發見することが出來ようと思ふ、即ち彼等の所論は兩性の問題を除外して居る、男女各々天恵の不平等があることを論外に於て居るのである、更に根本的天職の相違する點に於ても無省察で何等考慮されて居ないと云ふ一事である。

男女平等なるべきは勿論であり、不平等である可きことも亦之を否定することは出來ない然らば日本現代の新婦人運動なるものは其の意義甚だ不徹底なものにならざるを得ないではないか、故に著者は今少しく重復の感はあるが兩性問題より新日本婦人問題の意義と日本婦人の持つべき信念とに就て言及して見たいと思ふものである。

二五、無意義なる男女兩性比較論

而して其の前提として世の中の總ては悉く争闘の二字に歸結し得るものであることを明かに述べて置きたいのである、即ち精神的にも物質的にも宗教も哲學も男女も總て其の内部は闘争、平たく云へば生物の生存競争である、然も其の争闘の世界から日本民族は如何なる信念、如何なる優勝の地位に立つべきか、これ以下各編に於て述べんとする一大眼目なのである。

由來日本に限らず總ての男性は男性が勝れ女性が劣ると稱し、女性は又女性が優れ男性が劣るものだと考へて居る、然して其の兩性優劣論として擧げらるゝ男性の主張點を見ると、第一女性は多血質なること、多感多情の素質を持つて容易に外感に動かされ容い、第二に神経質なること、膽液質なること或は粘液質なること等が擧げられて居る、多感質なる果結容易に人と親み易く、愛嬌や動作に富み心の變化が多く常に上ツ調子の態度である、理性は不足し組織的の腦力に乏しく、依頼心に富み小成に安んずるの通弊を有する、然して其等の原因の總てをなす

ものは婦人特有の月經作用に歸する、女子は成春期に於てグラーフ氏胞の破烈によつて毎月二十七八日目毎に一回に百乃至二百瓦の血液を排泄するために男性に於て見る能はざる精神亢奮状態に陥り猛烈なる、ヒステリー即ちノイラステニーに罹るものであると云ふ、先づざつと斯様な判断が男性から下されて居る。

二六、婦人の獨立とピールストルフの勞働第二位説

ステットリン嬢の如きは女性の弱點に就て世界幾百萬種の動物中女性が男性に頼りて生活するものは單に人類あるのみ、換言すれば女性が生活の資料を男性の恩恵に仰ぐは是れ人類が他の動物と異なる所の特徴である、男子は一定の生活の資料を得ることによりて其の妻を求むることを得るも女子は一定の夫を得るによつて生活の資料を得るなり、事情既に斯の如し、故に婦女たる者其の生活の資料を得んと欲すれば出來得る限り、夫たる者の性的愛情を求むることに努めざるべからざるなり、云々と言つて居る、而して更に女性の弱點以上の如くなるを以て男子のみが人道を發揮するに反し、他方に於ては婦女子は徒らに女道のみを發達せしめ以て男女兩性の道徳上の状態に大なる損害を與へつゝあり、斯くの如く兩性の相違せる開發は女性に大なる不幸を齎らしつゝあるが故に女性の不幸を救ふべき方法としては結局經濟的獨立をなすによりてのみ之を防止することを得、即ち女子職業の開發に如くはないと論斷したのである、然るに之れに對しピールストルフは性理學上の婦女子の特質を論じ缺點を擧げ婦人の職業上に於ける地位は第二位以上に進むことを得ず、婦人勞働は男子に比し寧ろ其の勞働缺乏を填補することを以て天職とすと斷じて居る、以上兩論が如何なる決勝點までに到達し得るかは漸く疑問とするも、近時婦人が經濟的獨立に向つて如何に自覺し努力しつゝあるかは、次に掲ぐる著者の調べた婦人職業團一覽表に見ても其の勢力の一般を推察することが出來よう、女教員、看護婦、女醫、女記者、女速記者、タイピ

現代思想概論

スト、女事務員、女店員、保姆、家庭教師、電話交換手、閨秀書家、音楽教師、女小説家、寫真師、理髮師、救世軍士官、自動車々掌、産婆、插花師匠、茶道師匠、琵琶師、謠曲師匠、義太夫語り、奇術師、女優、妾、モデル、髮結、女給、女按摩、曲馬師、裁縫、活動辯士、割烹師、やりて婆、切符賣、女郎女工、法界屋、湯女、女飛行士、矢場女、呼賣商人、小原女、潜水婦、雜使婦、女中、ヨイトマケ、辻賣ト、造花師、劇場仲士、商品陳列館番、ゲーム取り、如斯現象は一面に生活難の襲來は婦人の座食が許されなくなつて來たと云ふことも之で證據立てられて居るけれども此の現象は必らずしも婦人運動の奏效とのみ見ることは出来ない。而して婦人の男性批判論によれば全く男性の批評に反對するものであるが、之等の男女優劣論は畢竟するに各々自然の配在を度外視したる兩性の争闘論であり自惚れ根性の發露に過ぎぬ、殊に歐洲戦争の影響を受けた婦人間の思想は一層に男性に對する反抗心をそゝつて此處に端なくも舊來の男女平等論、女子教育論、

參政權獲得と云ふ様な叫聲が婦人の間に高調されて來たが、之れも要するに科學を根底とする近代文明があらゆる理想を排して道德の標準を危くし、宗教、信仰さへも動かすに至り、所謂精神的無政府主義の時代が來たと同時に、懷疑や苦悶が彼等をも襲ふて來た、めに急激であり短慮であると稱せらるゝ婦人が精神上的の羅針盤を失ふに至つたからではあるまいか。

二七、婦人運動と天職

そこで考へて見たい一體男女兩性の優劣を比較すると云ふことが根本に於て出來得べきか否かと云ふ問題である、性其ものが最初から不平等に作られて居る以上到底何れが優勝の地位に置かれて居るかと云ふ様な問題は殆んど成り立たぬ筈である性の問題を度外視して男女問題の解決や優劣を決定することは出來ない問題であらねばならぬ。然らば婦人運動なるものは何を基準として没發したもので

あるか、要するに問題は婦人の經濟的獨立をなすことが男子の横暴より免れ得る唯一の手段である、婦人は須らく總ての點に於て男子と平等に自由であらねばならぬと云ふ議論ではあるが、既に生理的に於て男子の如く自由ならざる自然の束縛がある以上到底男子と總ての點に於て肩を並べ能はぬことは明かである、然して其の肩を並べ能はざる點に於て女子の優勝な地位が認めらるゝものとしたならば何を好んで婦人開放を叫び參政權の獲得を叫ぶの要があらうか、男子には男子の本分があり、女子には自ら女子の天職が與へられて互に相冒し相争ふべきではないことは燎々明かであるのである、究局するに婦人は男子のために作られ男子は婦人のために作られたもので生活上許され得る限り女子の活動範圍は擴張さるゝであらうけれども婦人が子を産み又子を産まんがために男子を愛し自己生命永續の全責任を負擔しつゝあるのである、然るに男女各々の本能本分及天職等總ての地位が全く轉倒すると云ふことは、先づ過去、現在及將來に於ても見ることが出

來ないと云つてよからう、だから著者は前に云つた様にピールストルフの説に賛成し、婦人は職業上に於ては寧ろ第二位にあつて男子の補助となり、子を産み生命の永續を圖ることを婦人第一の天惠的の優勝權として認めたいのである、男子は此の婦人の優勝權に對しては服従しなければならぬ、子を生むと云ふハンデキャップが與へられて居ることを認めねばならぬ、夫れが自然の法則に適ふものであることゝ信ずる。

二八、男女權の逆轉は人類自滅の基因

處が今もし女性が男性を扶養する時代が來たと假定すると男子は永い間女子は愛すべきものとし又そうした因襲的觀念に終始し來つた男性に取つては婦人の愛育を樂々と受け得る事になるであらうから誠に遊惰好きの男性に取つては結構な都合のよい話である、然し矢張り女子側に於ても遂に「男子と小人とは養ひ難し」

と云ふ様な悲觀的格言も生れて來るであらう、そう云ふ悲觀論の婦人達は獨立平等の運動が成功しても男子扶養の義務がなみ大抵の苦勞でないことが自覺される様になる、又樂觀論者に於ては或は多數の男子を愛することにもなるであらう従つて現在の如く矢張り反對に美男子の爭奪戦も起つて來る、即ち經濟的獨立の優勝者が最も都合のよい男子の配偶を專有することになり劣敗者は遂に青春期を獨身の悲哀裡に過さすべく餘儀なくされて來る、従つて男女轉倒による種々なる弊害が現在以上に起つて來る、それはよいとして此處に最も憂ふべき事は女子が青春期を生活難の犠牲に供する結果、著しく婚期を誤り出生率が低下し引いて人類の自滅時代が一層早く廻つて來ることになりはせぬかと云ふ問題であるサンガー説が毛蟲よりも嫌いだと云ふ著者の主義は男子は女子を敬愛し、女子の天分を認めて之を庇護し盛んに強健なる國民の増殖を圖つて之をドシ／＼世界各国人口稀薄の土地に移住せしめ、全世界の人類は悉く大和民族を盟主と仰ぎ、そうして、

そこに人類の眞の平和が保たれて行く様にならねばならぬ、斯様なことが著者年來の希望であり主張であり助平根性なのである、斯の如く男女兩性は一大天職が明瞭に分與されて居る以上女子其者が人倫や道德までも無視して所謂新思想運動を試みることに、如何に無謀であるかと云ふことは一應肯かるゝであらうと思ふ、或は之を以て頑迷だとする婦人もあらうけれども女子には内治を掌り子女を育て温順に貞操に謙遜に男子のために人類のために、生きねばならぬものだと思ふことは、然が作つた一大法則であると考へられる、然して頑強不撓の精神を以て大は國家國民の利益のために活躍し、後世に國光を發揚すべき剛健の氣を養ひ小は社會の根元をなす一家の和平のために男女相携へて互に其の足らざるを補ひ相救けて我が皇國の基礎を確立すべきではあるまいか、

前編に於て著者は近代思想の大要と其の潮流に處すべき大和民族の信念に就ての概論を試みた即ち、

第一には自然の威力に對しての人間生活の状態と、次に自然を制服することを目標とする科學の力が如何に小さいものであるか。

第二には此の小さな科學の力や其の發達の道程から生れた總ての思想問題等に對して大和民族の捧持すべき信念は那邊に確立すべきであるか、現代日本の中堅たるべき青年は須らく超自然的精神の存在を認めて以て立國の主義思想を誤つてはならぬと云ふことを説いたつもりである。

二九、物質主義は呪咀の世界を創造す、

要するに現代思想は徒らに表面主義即ち物質主義にのみ傾き、現實本位の文明は餘りに外部の仕事のみに忙はしくして人間の内部生活を顧みるの餘裕なく徒らに人類は此の外部の世界の奴隸となり事業實現の世界にのみ人生其のもの、範圍を限らんとして居ることが大なる矛盾や撞着或は誤謬懷疑の社會を作り出しつ

ゝあるものであつて、然も自ら求めて自ら呪咀の世界を作り僅かに瞬間の生を機械的に過ごし行けるに不過、果して然りとすれば、人間其のものに高遠の理性なるものが存在するや否やさへ疑はざるを得なくなつて來る、

然しながら考へて見たいことは人間は實際は精神的勞作を爲すものであり、單に自然の中に一物質として生存するものでないことは明かである、のみならず寧ろ自然を超越せるものであることを信するものである、なせならば夫れは自然の連鎖の單なる斷片でなくして寧ろ自然を體現し、且つ自然以上のものを考ふることが出来るからである、

我々は斯ふ云ふ觀念を以て理性の人として社會構成の一員として人間生活の全道程を眺めて見たいのである。

三〇、自然科學者と社會觀識の信念

自然科学者は自然を征服することを發明するのではない、彼等は自然に行はるゝ處の事物の態形をたゞ有のまゝ、ちつと正しい眼で眺めて誤らざる自然の法則を發見することを努めればよいのである、そうして夫れを赤裸々に發表すればよいのであつて、それが人間の生活と關係があらうがなからうが一向頓着する必要はない飽迄も自然に忠實であればよいのである、處でもしも其の發見された處のものが國家國民に關係がある、そう云ふ觀念が這入つて來ると、我々は之をどう云ふ風に取り扱つた方が利益であるかどう判斷すればよいか、斯様な場合には吾々は常に國家、皇室、國民のために誤たざる正しい判斷を下して行かねばならぬ、一朝此處を誤つたら最後である、そこには大なる不利、大なる危険が起つて來る今一例を引くと、此處に新聞紙がある、新聞と云ふものは常に新らしい社會の事件を見たまゝ聞いたまゝに有のまゝを報導するものである、然して夫れが如何なる惡影響を社會に與へようと一向無頓着である、時には營業政策上讀者の歡心を買

ふために頓でもない記事を捏造して堂々と之れを書き立てる、従つて謬つた記事が多い場合もある、又時には人の名譽や人格を傷ける様な記事をも平氣で掲出する、そうした場合に抗議を申込むと欄外か雜報欄の片隅の、なるべく人目に觸れないホンノ一部分の紙面二三行を割愛して申譯的の取消し文を掲出して濟まし込んで居る、夫れが虚報であつたからとて別段世間に對して謝罪文を掲げるでもない、實に平氣の平左であり無責任極まるものである、然し善良の風俗や公の秩序を紊亂する様な記事を載せたら最後、忽ち法によつて發賣禁止を喰はされるのであるから、若し左様なことが毎々重なると云ふと結局株主に對して配當が減つて來る勘定になる、のみならず眞摯なる愛讀者の信用を失墜することになるから可成は發賣禁止を喰はぬ程度で嘘八百を並べたり怪しげな論說などを載せて一人でも多くの讀者を釣ろうとするものである、斯様な風で新聞と云ふ奴は實に度し難い、しろものであつて社會に大害を流すことが多いのである、然しながら一面に

は又之れと同時に絶大なる力を以て善い働きをするのである、新聞がなかつたらば到底今日の如き人文の發達は望まれなかつたかも知れない、して見ると結局新聞其のもの、價値なるものは十 一で零であると云つて差支ない、然るにどうかすると理性に欠けたものは其の十の價値を重く見る、一體に人間はそう云ふ新聞記事に刺激されて、善にも惡にも動じ易く忽ち感憤すると云ふ様な習癖とでも云ふものがある、そうして又新しい新聞種を製造するのである、

例へば不逞鮮人迫害問題の如きも新聞の記事に誤られて昂奮の餘り前後の思慮を失つて心ならず罪を犯した、善良の者も決して少なくはなかつた様である、之れは悪い方の刺激の發露であつて、其の影響の及ぶ處は頗る大である、又反之ウツツ米國大使が日本の不幸に寄せられた同情は實に大したものであつた、そうして大使が偶々賜假歸國さるゝ事になると東京市民は非常な熱情を以て大使を送り大使の同情に感謝の意を表することが出来たのである、もしも新聞の力がなかつ

たならば或は彼れ程までに強い熱誠な市民の意志は表示されなかつたかも知れない、之れは善い方の新聞の影響であつて國交上にも偉大の好印象を齎らすことになつたであらう、此の兩例に就て考へて見るのに、前の場合は爲すべからざる行爲を新聞の記事に煽動されて敢行し後者の場合は日本國民の性質として當然なすべきことをなしたのであるが、今苦し冷靜に理性の判斷に訴へて考へて見たならば、前の例の如き悲しむべき事件は決して突發しないで濟んだであらうものを實に後になつて考へて見るとそれは誠に取り返しの付かぬ罪惡を敢行したことになつて終つて居るのである、自分の愚かさ加減が斯様なことに依つて明かに知られ自分の思慮の足らなかつたことが後悔されるのである。

斯様に考へて見ると人間は全く誤られ易く感憤し易い動物であることが知れる故に此の動物の踐み行ふべき軌道に就ては昔から幾多の聖人先哲によつて傳へられて來て居るけれども、今日の人間は多く夫等の道に志すことを努めようとはし

い、努めないのではないもう古臭くなつたのであると云ふのである、

七〇

三一、無識者の信仰心の効果と有識者の無信仰

耶蘇のバイブルも釋迦の教典も頓々今日の人間には何等の反應がなくなつて之を讀誦するものさへ稀になつた、偶に在つても夫れは牧師とか僧侶、そう云ふ様な商賣人達の説教や講話の材料位に供さるゝに過ぎぬと云ふ有様である、一般の者に就て君は一體何宗だと聞くと無宗教だと云ふ、偶にはクリスチャンだと答へる者も居る、然らばクリスチャンは如何なることを以て根本の教義とするかと再問すると、神様を信することだ、現實の世界に神の存在を認めることは出来ないが兎に角吾々は神から恵まれた救世主エスキリストの愛の御手に縋つて居れば總ての罪は許される、たとへ悪い事をして悔ひ改めさいすれば天國にも登れると云ふ、實にそう云ふ極く淺薄な信仰なのだ、だから牧師でも傳導師でも遂に誤ら

れて人妻を横領したり、寄附金を猫婆にしたりする、従つて耶蘇と云へばもう反對宗のものには二足三文の價值もないものゝ如くに考へられて居る、そうか君はアーメン、ソーメンかなど、冷眼視する様な傾向も生じて來て居るのである、實に眞實即ちアーメンと云ふ言葉を御茶にするにも程があると云ふものである。

物古した永平寺の默然和尚の様な坊さんの御説教を聴いても、其の場ではひどく感服するが、夫れなら夫れを永く信するか言行忠信するかと云ふと、そうではない、寺の門から出たら最後、何んだい彼の生臭坊主が偉らそうなことを云つて居るけれどもあれで中々隅に置けない色氣と慾氣を持つた坊頭なんじやないかと早速坊さんの人格評と來るのである、

現今は教會でも寺でも青年達が敬虔的興味を以て日參すると云ふことは殆んど稀れになつた、單に青年達ばかりではない一般にそうだ、寺などは殆んど婆さんか爺さんの外參詣するものがない、名所舊跡と云ふ様な寺でもあると全く縁も何

もない處の者がわい／＼と參詣することはあるが、兎に角教會にしる寺にしる大分信者を増すことに骨が折れて來たのである、

信者でなくとも先づ教會にでも行つて見ようとする人はまあ大體に於て何ものかを求めようとする人々に違くないが、讚美歌を歌ふ段になると、讚美歌を知ると否とに不拘皆一齊に起立させられる、それは絶體的ではないが起立して何やら歌の様なことでも云はぬと外聞が悪いので鼻歌と讚美歌とを合奏して歸つて來るものもある、そう云ふ人は祈禱の文句は知らないが然し、矢張り牧師がお祈りをする間は頭を下げて眞妙な装ひをせねばならぬ、そうしてアーメンで首を上げ席に腰を下ろす、こんな様な形式で折角の講義は大分と有難味が消されて終ふと云つて居る。

そこへ行くと日蓮さんは威勢がいゝ、扇團太鼓でナムミョー法蓮華經ツツテン
デレスケデン／＼と破れんものなら破けて見よとばかり撥に渾身の力を罩めて打

ち叩く向ふ鉢巻の哥公も梅干婆さんも御熱心なものである。

救世軍にした處で矢張り、そうである、克己週間などになると、どこの小隊からも太鼓やタンポリンを持つた若い士官や女兵士達が勇ましい軍歌を奏しながら繰出して行く、そうして交通整理上の邪魔にならぬ様な概して小暗い夜の街頭などで路加傳第何章がどうのバウロがどうしたのと聖書解釋の大演説をやり、それが濟むと、又一切り、「イザー來れ諸共に惡魔の軍勢と戦ひて関擧ぐるまーで」と此處にも猛烈な精神戦鬪の喊聲が起つて來る彼の戰士達の勇氣は實に感服の外はない、又毎年クリスマス前になると東京邊では救世軍の慈善鍋が目貫の町々に出る、そうして其の鍋からは臈て年の餅が出來て多くの貧民達に施されることにならんだが、近頃は其の餅も思ふ様に搗けなくなつたと云ふことである、まさか窮民が殖えたんでもあるまいが一般に救世軍のそうした働きに對してさへ感じが純つて來たことは事實である、此の救世軍の戰士達の悉くがそうだと云へないが

日蓮信者と同じ様に矢張り活版屋の職人とか製本屋さん或は直接救世軍の事業に従事する散はれた婦人達が多いのである、其人達はそうすることが一番愉快なことである、何より尊いことである、だが然し其の尊ひことであると云ふこと以外に神が何であるか宗教と云ふことに就て餘り深い理解がないにしても日蓮に信心する哥公、梅干婆さん、さては救世軍の士官兵士等の人々の心理には或る瞬間乃至は其の人々の肉體が活きてそうした働きに従事して居る間は確かに何物かを掴み得て居るに相違ない、そしてそれが社會のため、國家のために決して害になることではなく寧ろ大いに賞揚すべきことである、然るに乃公は天晴れ知識階級の人物だと稱する人々が神社の崇拜すべきことは説くが、御本人達は一向に寺にも参らず、神にも参らず、町人はどんな家にも、天照大神を祀る、神棚があるけれども、彼等には夫れさへ備へてないのだ、それで如何程立派なことを云つたからとて、下級者が之れを感服する道理かないではないか。

三二、敬神思想と其の功德

今一つ、今度は淺草の觀音様や成田不動、或は豊川稻荷と云ふ様な神社佛閣に参詣すると社前にぬかづける多くの所謂善男善女達があることを見るであらう、そして其の善男善女達の心願なるものを解剖すると、それは實に面白い心願が重ねられて居るのである。

或る放盪息子の母者人は息子の性根が改めらるゝ様に一心不亂に合掌する、その又すぐ隣りにはお茶屋の女將がどうぞ金満家の息子さん達が盛んに放盪に来て呉れる様にと頗る熱心に拜んで居る、前者と後者の心願は全く正反對である、又其の隣りにはどうか良縁に有り付ける様に、お金が儲かる様に、無事で幸運が続く様に、病氣が治る様にと云ふ風に色々の起願がある、中には單に神様は難有いものだと云ふ丈けのことで、ちよつと帽子を取つても辭儀をする位のものもある、斯

様な風で實に觀音様も御多忙であらせらるゝ、不動明王の如きは幸ひ八本の腕の持ち主であらせらるゝけれども到底八本や十本のち手では中々間に合はない、それは實に御多忙である、千手の觀音様でもどうかすると矢張り警察の手をお借りになることさへある位に御多忙な場合がある、然しそうした參詣者は矢張り何かの御利益があるに相違ないと、拜んだ瞬間丈けでも實に晴涼しい氣持ちになつて居るに違いない、縦令仁丹を甜めた程でなくとも氣持の悪い筈は絶対にないのである、聽て乃木神社などにもそう云ふ善男善女達が祈願に来る様になるであらう、此處幾十年、幾百年間の後には屹度、そう云ふことになるに違いないが、乃木さんにしる、不動明王にしる觀世音菩薩にしる或は又稻荷大明神にした處で慾徳づくの兩願ををいそれと右左りにお取上げになると云ふことは到底出来ない業であらう、何れにせよ神社に御参りをすると云ふことは至極結構なことで、又夫れが善かれ悪かれ祈願者達の心裡に多少なりとも嚴肅純正な心作用が來起つてること

あるならばホンノ一時の間でも荒み切つた娑婆氣根性から解脱し得る丈けでも大變な功得と云つてよからう、日本幾千萬の人々の悉くが神の加護を願つて常にそう云つた心持ちで日々を送り續けて行くことが出来たならば實に平天下安樂國である、だから階級の上下を問はず、慾徳づくでなく日々進心して良心の戒とし、神佛の加護によつて道德の實踐窮行をなすことが叶つたならば、現代の様な、あらゆる方面に廢れ切つた思想などは起りもすまい、そこが淺間敷い人間でお参りした時丈けは頗る眞妙だが一巨神門を去ると忽ち又夜叉の世界に放浪する基督教國でも日曜安息日には必らず、老若男女打ち揃つて教會に行くをうして神に感謝すると云ふ良習慣がある、然し同じ神の子でありながら宗派が違ふと反目したり喧嘩を初めたりする、彼の千六百六十六年の英國倫敦の大火災の如きも宗教の反動であつた即ちカトリック教徒が放火したことに原因して居るのである、國の東西を問はず、近來では牧師でも尼僧でも、或は又神職でも皆一個の職業、それは

食はんがための職業であると云ふことが先入主となつて觀察される結果尊敬すべき牧師や僧侶の説教でも講義でも少しも權威がない、有難味がない、一世を風靡する程の大人格者が出て、そうして今一應古臭いとされる佛典や聖書の講義でもすることになれば少しは効果があるであらう、けれども普通の人の説教位では中々満足しそつともなくなつて來て居るのである、現代人はもう聖人や先哲の教訓に聽こうとはしない、そうして其の難有味を味ふべきことも忘れて居るのである、であるから之を説く人の人格如何によつて永世不滅とされた、人義道德のお話も高く買はれたり安く見積られたりするるのである、

三三、宗教の藝術化と吾人の覺悟

斯うなつては人間たるものも迷はざるを得なくなる、血迷はざるを得なくなつて來るのも無理はない、そこで近來は舊宗教も其の布教の形式を變へなければならぬ

らぬことになつて來て或る大臣の如きは宗教の藝術化を策したこともある、即ち活動寫眞にしたり劇に仕組んだり又は浪花節、説教節と云ふ様なものを用いて布教し様とした、けれどもそんなことで徹底的に人心の安定や險惡な思想を撲滅することは出来ない、と云ふのは之等の總ての人爲的方法が如何に進歩したからと云つて夫れはホンノ形式丈けの話であつて、現代の如く一切合切が悉く科學の力、文明の力によつて支配され、只管財寶を得んことにのみ、氣を焦たしめ、焦つて居る人間に宗教の眞髓だの精神の活動と云ふ様な自己の内的世界を考へる様な違はないのである、然も世の中が複雑になればなる程人間の精神的内容は益々貧弱の度を加へて行くことになつて來るのである、此處だ吾々現代青年の大いに思慮を廻らさねばならぬ處は、實に斯かる世態に至れる通弊を觀破して以て精神的に國家百年の居所を樹立せねばならぬのである。

三四、國家の定義と道德

著者は敢て五倫五常を説くべきことをせないが今日の人間に之等先哲の教訓を遵奉するものが果して幾何あるであらうかと云ふ問題にブツつかつたならば夫れは誰れでも甚だ迷はざるを得ない問題であらうと信ずる國家社會何れも其の内容に於ては何等異なることなく、たゞ社會と云ふのは人の集合團體を指す處の名前であつて國家とは一定の領土や國民があつて之れに統治權の主體たる元首がある此の三者を國家の要素とし政治的に組織された團體であると云ふのが法律學者の定義である、然し何と云つても國家の始まりは人である一私人が國家の始まりであり又其人の此の精神が狂つたり曲つたりしては決して一國一己人の財寶も生命も安全なることは出来ない、故に吾々は以上の三要素の外に國民精神を加へたいのである國民は皆一樣に國を愛する、國政を愛ふる此の精神があつて國家は進歩

するのである然るに一私人としての人格の修養を怠り五倫五常を觀みず又我が國家の現状や吾等傳來の人情風俗を考へずに徒らに其の國狀と相容れない外來の思想に心酔し五倫も五常もそれ昔の哲學とのみ考へる様になつて來た、現代のハイカラ共に果して國家の意義がよく徹底して居るであらうか實に憤慨に堪へないものが多々あるのである、國を治むる者が王道を以てするは之れ爲政者としての徳である、例へ形に於て異なるとも其の精神に於て異なる處があつてはならぬ、然るに今の爲政者は世情の推移と共に古の王道の如きは古人の夢に過ぎずとなし、仁義道德も時代によつて變るものと考へて居る様である、然し人間行爲の標的である、仁義道德が時代に依つて易るとすれば、是れ程當てにならぬものはない、又尊ぶに足らざるものはない、由來仁義道德なるものは千古不滅の眞理であつてこそ其處に大なる權威もあり、價值もあらうと云ふものだ、若し爲政者が仁義道德を無視し、唯權謀術數是れ事とし、己れのため、己れの時代だけ無難でさへやつ

て行けば夫れでよいと考へる者があつたとすれば夫れは大なる誤謬であると信ずる、現代の爲政者に果して此の道徳を解せるものがあるであろうか大臣を一年もやれば數十萬の富が出来る、其から武士は食はねど高楊子と云ふ言葉があるが現今では砂利喰ひの役人も出れば議員を商賣の看板に悪用する奴も居る、斯くては如何に役者が揃つて見た處でどの道大した善政が敷かれようとも考へられない、従つて人情が地に墜ち、風紀は弛み出すのは當然のことである、手本となり模範となる人物の間にそう云ふ事實があつたり風聲があつては仁義も道徳も破れ果てた鏡、兜で一向物の役にも立たぬ。

然し此處に是非とも書かねばならぬことがある、それは世の中が如何に類聚の思想に満ち満ちたりとも、ピクトも動かぬ吾々同胞の大信念、それは畏れ多くも上御一人と下七千萬同胞とが如何なる歴史の上に進んで来たかと云ふことである、此處に於て勢ひ筆は五倫五常の一部にも觸れねばならぬことになる。

三略の中にも「主と臣と同じきは昌へ主と臣と同じからざるは亡ぶ」とある、古來日本帝國に於ては君臣の義が自ら明かであつて、民は君を尊敬し、君は民を愛撫されること甚だ深く即ち君は民の心であり命である民は主君の體である、此の兩方が相俟つて帝國は昌へて來て居るのである。

故に君に忠なるは自分自身に忠なると同一の結果になり引いて國家に忠なるの所以である、此の永却不滅の眞理は幸ひにも我が國民の頭腦より洗ひ落すことの出来ない道徳なのだ、我が國民が、

皇室の御繁榮と國家國民の安泰とを願ふが如き情緒は決して之れを他の國家に求むることは出来ないものである。

三五、愛國心とシセロ、シヨウ、ゲーテ

皇室を思ひ國家を思ひ、他國より強く美しからんことを希ふは國民自然の情で

あつて之れを眞の愛國心と云ふのである、愛國心は國家發達の歴史の如何や國民教育の如何によりて異なり世界各國必らずしも一樣ではない。

シセロは愛國心を説くに「父母は我れ之を敬す、妻子や親戚や朋友や皆我れ之を親愛す而して此等の親愛の情は皆我が國と云ふ一物に集合して悉く其の内に包含せらる、いざ一國の一大事と云ふに方りて誰か之が爲めに身分を致さざらんやと云つて居る

シヨウは愛國心とは我が生れたる此の國は他の一切の國より貴くして勝れる職國なりとの信仰心を謂ふなりと云ひ、

ゲーテは泰平の世に在りては愛國心は只人々庭園を掃除し、家業を勉勵し、處務を習學し、一國の繁榮を圖る中に在りと云つて居る、何れ大同小異の説ではあるが我が、國民に於ては更に、君に忠なるを以て其の最も熱烈なる愛國的精神の表徴として居る、此の點が他國の追従を許さぬ點である、然らば何故に我が國民

は斯かる信念を抱持するか、夫れは國體が他に異なる萬代不易の神秘の事實が存在するからであつて根本に於て君に忠なるべき日本人の道德が他の及ばぬ一信念の上に築がれて來て居るからである、然るに前にも云へるが如く一部國民には此の國體も忘れ此の國體を基準とする國家組織を忘れ、一部爲政者は全く愛國的精神を失喪し、徒らに私利私慾に肆にして奉公の誠を忽にするに至り、此處に全く日本國民の準據して以て安寧幸福を期待し得ざるには至らぬかとさへ危まれるに至つた。

三六、日本現代爲政者と吾人の覺悟

日本現代の政黨黨員の如きに於ても正しく黨利黨略のために束縛されて國家國民のために、眞に國士的精神を有するものが幾人あるであらうかとさへ疑はしめる然し此の遺憾なる政治家の腐朽墮落を致さしめた罪は何人に歸すべきであらう

か、國民の無自覺に歸すべきではなからうか。

八六

兎に角現代の選舉界を見る丈けでも其の頹廢氣分を慨歎せざるを得ない、國民たるものは大いに覺醒して國家の選良を出すに臨みては眞に國家の爲身神を放擲する勇氣と確固不拔の、所謂國士的人物を議政壇上の人として送らねばならぬ。

我れは政友會なるが故に、政友會の旗色を鮮明にせる候補者を選ぶ、俺は父の時代より憲政會に關係を有するが故に其の黨を援助すると云ふ様な狭小な考へは絶対に捨てねばならぬと信する、そしてどこまでも一人一黨で行かねばならぬ、眞に選良なる候補者其人の價値を發揮させねばならぬ、英國にも保守黨、自由黨、労働黨があるから日本でも左様な永續的有形的黨派を作らねば善政は行はれぬとするのは大間違ひである、何でも鎌はぬ政府の施政に反對するものは敵も味方もない其の施政の方針に對する即席黨が期せずして成立する様にならねばならぬ專恣横暴を事とし黨利黨略の外國家も國民もない腐爛の政黨は須らく叩き破つて終

はねばならぬ、夫れが何黨であらうが一向に顧慮する必要はない、公平無差別に眞の愛國的候補者を選び全く新たな政黨を作らしめねばならぬ、今や普通選舉は實現の時代に迫つて來た我々青年は大いに立憲國民としても目覺めねばならぬ時代が來たのである。

一國の國策を論ずる議場の光景を實際に見るときに、誰か之れに憤慨せざるものがあつたであらうか、

我々が選んだ一代議士は苟も神聖なるべき議場に於て居眠りを事とした。反對黨員の議論は正に國策上正當な銘論であり、條理が立つて居ると信するけれども黨情に縛られて、己むを得ず自己の本心に悖る虚偽の採決に加はつた、選舉區では營業税の廢止論や小作農民のために戦ふべく相當の熱を持つて演説もし宣言もした立派な代議士候補者であつたが、一旦議場の人となると何一つの發言權を得ない、そうしてドウ／＼廻りと自黨のために頭數を並べる外に無爲無能國家のため

にも區民のためにも何等の活動もせず、所謂一個の陣笠議員に終つたのである、熱心なる區民は全く裏切られてしまつた形である、之を被選舉人たる候補者から見ると彼等の多くは政黨の一陣笠たらんがため、政治屋たらんがために多額の運動費を浪費し叩頭百拜して神聖なる一票をより多く贏ち得た、あ上り議員に過ぎなかつただけである、誰か此の政黨政治の腐敗に憤怒の情禁する能はぬものがあつたであらうか。

俺の處から出した議員は柔道の達人であつただけに自黨の旗色が悪いと見るや盛んに彌次を飛ばし蠻聲を浴せ、さては演壇に駆け上りそこに在つたフラスコを打ち振り廻して天晴れ醜議員たる名を成した、其の外に區民のためにも國家のためにも何等氣を吐くこともなく功を立てたこともなかつた、

こんな手合にはモンテスキウの三權分立論から説いて聽かせて、今少しく法治國の何たるかをたゞき込んだ上でなければ滅多に議場に送るわけには行かぬ、そ

う云ふ感じを以つて議會を見たものは獨り著者のみではあるまい、とは云ふものゝ中には學問と云ひ智識と云ひ立派なもので、政見を尋ねれば堂々たる意見を吐き國事を談ずれば人をして傾聴せしむると云ふ人物も居る、然し一旦其の局に當らしむると忽ち種々なる情實に支配されて偏頗の利害に左右され平生の議論に副うぬ行爲が多い俗に云ふ「鮎ごつこ」に終らざるを得ない様になつて居る、此の通弊は議員其者も痛切に感じて居る處である、然らば之れを如何に矯正するかと云ふと我々としては現代の政黨や議員の素質を改良するより外に仕方がないと思ふ即ちでくの棒の様な黨の首領や領袖などを極力排除し眞に國家國民の犠牲たり得る國士肌の首領を押し立て公平無私の國事に奔走する新人を以て恰も革新俱樂部に似た様な一人一黨所謂黨派であつて黨閥を作らぬ者を希望せざるを得ぬ、形式の上で大團體を作らねば自己の信念を國政に發露することは出来ぬと云ふ様な謬見に囚はれない、そうして永續的に是が非でも一團となつて黨内の言論の自由を

抑壓し眞人も虚人も一緒になつて横暴を恣にする様な、情實本位のものでなく、國家本位の黨派を組織せしめ、政府の施政方針が誤つて居れば之を彈究し、政府が斃ふるれば之れに反對した處の人物、それは甲黨乙黨の區別なく打つて一團とする聯立内閣を作ると云ふことになる、現代の中間内閣が形に於て吾人の希望に似た處があるが、之れを元老などの力を供らず、國民自らが作るのである、そうすれば今日の様なレッテルばかりを取り換へて賣り出す様な粗末な内閣でなくもつと立派な内閣が出来て施政其のもの、權威も強く又種々なる政治的弊害も起り得ない、従つて官僚政治がどうの憲政の常道がどうのと騒ぎ廻る必要がなく、敵も味方も是とするものは是とし非とするものは飽くまでも非とし眞に輿論の大勢によつて國政が調理されて行くことになるであらうと信ずる。

被選舉人も選舉人も此處まで進んで来なければ理想の政治は行はれ難い、然も國策の大方針は常に變動することもなく、立國の大精神は常に如斯王道の上に樹

立さるゝものだ云ふことになるならば、それこそ眞に立憲國としての値打があらうと云ふものである、又國民悉くが愛國の精神を表示することにもなるのである、現今の如く口先ばかりには國家のためだ一國の爲だと稱するも、私利私慾或は黨略のためにのみ左右され、毫も國民國家を顧みない、大政黨と云ふ横暴の團體が無知の選舉民の委任状付きで出来上つて其の團體の力によつて有智の多數國民の本意を無視して天下を治めて行くと云ふ様な非立憲的な政治が行はるゝとしたならば、決して國家の幸福を増進すべきでないこととは明かである。

唯強きものは國民である、飽きでも強きものは新國民の政治的知識の進歩であらねばならぬ最早政黨政派を超越した國民共同の政治的知識によつて帝國々憲に従ひ萬般の惡風弊を打破して健實なる國家改造の事業に覺醒せねばならぬ時代が來て居るのである。

然し此處に惡弊風と云ふと、如何にも漠然砂漠を見るの感があるが、之を概括的に云ふならば、只管自己生活の維持保存と云ふことにのみ焦慮し人生一切の努力の目的は唯肉體の健全を計る、肉體の健全は一切の力一切の成功の本源と云ふ外に他を顧みるの違なく、刹那主義の満足を得ることのみ腐心する結果、時に眼中國家なく、國民なく自己の精神の立脚地さへも發見することが出来ないで果ては世を呪ひ人を羨むの風潮は目を追ふて強く此處に聖人先哲も疑ひ大自然の法則さへも犯さんとするに至つた、之れを良風潮と稱することが出来ないならば夫れは正しく惡風潮と云はねばならぬ、輕佻浮華病に罹つて居ると云はねばならぬ。

凡そ社會組織を通じて流るゝ人間の思想方針に就ては時代／＼によつて、之を種々に區別することが出来る、例へば一當代の社會組織に改造を加へて之を過去

の黄金時代に挽きもどさんとする方針、二當代社會を根本から改造する方針、三當代社會組織を根本として之れに重大なる改造を加へんとする方針、四保守的に當代社會組織其のまゝを固持せんとする方針、五全く新らしき社會を造らんとする方針、六人間の力を以て有意的計畫的に社會組織を改良し、七改造せんとするには總て無益な或は有害な業であつて只自然の成り行きに放任し置くのが最善の策であるとする方針等に別かつて論ずることが出来る、即ち現状維持主義、改良主義、復古主義、革命主義乃至は放任主義等であつて堺や大杉の如きは現代社會組織を根本から然も急激に改造せんとするものであつて所謂革命主義或は之を赤化主義と云つてもよいものである、乍然如斯主義を實現するには到底尋常一様の手段では出来ない又左様な主義が一朝一夕に容れらるべきものでもない、急激なる社會改造は破壊となり、動亂となつて其の結果は誠に戰慄すべき社會となり利する處少なく失ふことは露獨塊等の國狀に見るも瞭々明かである乍然世界の狀勢

は時々刻々に大なる變轉をなしつゝあつて人に於ても國相互間に於ても獨立孤獨の存立を許されざる今日に於ては勢ひ、己人主義、保守主義を捨て舊態を脱し全き新社會の實現によつて新鮮なる空氣に浴したい、行き詰つた當代社會を改造して、間生活をよりよく平和に安寧に幸福と歡喜とに満ちたものにしたと云ふ希望は何人にも起つて來る、此處に社會改造上に種々なる要求或は思想主義、理想主義——社會主義なるものが生れて來るけれども之等の主義思想なるものは己人主義利己主義一方に偏する時に於ては其の理想は無價値のものになる故に、吾等は上掲思想方針中如何なる思想が表現せらるゝ場合に於ても國家觀念が除外される議論に對しては之れを極力排除せざるを得ないのである。

肉體保存と云ふことは食ふと云ふ問題である、此の食ふと云ふ問題は現に種々なる議論を生じ遂には命懸けで騒ぎ廻る程に肉體保存の要求が激しくなつて來た即ち労働者と資本家とは此の問題の中心となつて常に紛亂騷擾を極めて居るけれ

ども之等は主觀的に云ふならば相互精神問題の錯誤缺陷に歸するものと斷言することが出来る。

今若し労働者が生活に困ると云ふならば困らない資本家が之を救ふのは道義人情の上から云ふと誠に當然のことであり、資本家が労働者の力を借らねば仕事が出来ぬとあれば、労働者は一番資本家のために肌を脱かねばなるまい、相互、昔からある日本人特有の義侠的精神で行かねばならぬ、然るにも不拘斯かる問題が起ると云ふのは此の義侠的任侠的精神が欠けて來たからである、労働團體なるものが出來て勞力と資本とは平衡せねばならぬと主張する様になつて來たことは餘りに資本家が横暴であつて労働の神聖なることを顧慮しなかつたからである、之れからは労働者も資本家も精神的であらねばならぬ義侠的であらねば決して社會は進歩しない、之れが日本のデモスクラテオである、そうして此の兩者は協調して絶体的に共存共榮主義で進まねばならぬ筈だ、國家の幸福のため國家安寧のため

めに、

斯くも明瞭なる道理が存在するにも不拘種々なる紛糾を見たこと全く食ふと云ふ問題にのみ焦慮するからである、然も之れを煽動する主義者があるからであつたのである、労働者でも資本家でも食ふ問題に當面する外に尙地位や名望、或は金權と云ふ様な肉が亡びると同時に消へて無くなる、實に便りない夫等のものを無上の便りとして居るからである、

九六

三八、労働者と資本家に對する提言

そこでそう云ふ人間があるとするならば著者は卒直に申聞ける。

「労働者よ食はんが爲めにのみ働く」と云ふ思想は既に古いぞ、汝若し眞に食はんがためにのみ肉體の痛苦を忍びつゝあるとせば、一切の私慾と一切の名譽とを捨て、大道に破碗一個を携へて食を乞へ必ずや天は汝等に食を與へん」。

「資本家よ、汝は金を以て名譽や地位を得んとするか、其の思想は既に古いぞ汝の短かき一生は金權に依つてのみ飾られざるを思へ」而して現代青年よ現代青年は須らく進新の思想を以て人生の行路を仔細に觀察して以て過去の垢染の風潮より脱脚して總ての虚偽と矛盾と撞著の世態と渡世の常態から解脱して他動の力により動搖せざる確固不拔の自己の大信念大生命大良心の存在を認め國家の安寧君國の幸福のために果又同胞七千萬衆のために、維新の志士達が王政復古の大業成就に功を樹てた如くに、此の第二の維新、即ち精神革命の時代に當面する我々現代青年は精神的に覺醒し大いに君國のために勇奮努力せねばならぬ、吾々は屁理窟をぬきに精神革命のために大いに其の修養に向つての實行に着手せねばならないのだ。

我々は自己の信念を信する如くに、日本帝國を信する、我等の祖先と吾等の君主を崇拜し我等の同胞が生命を捨て、國を守る歴史を信じ、世界に於て吾等の

國を最も美しく最も強くし、そうして日章旗の輝きをより強く高く廣く廣く世界に掲げねばならない。

三九、同胞七千萬と我が國史の回顧

吾に七軒の親戚がある、皆血族を同ふするものである、然も其の七軒の親戚に又各七軒の血を同ふする親類がある、斯くして次ぎから次ぎに親戚を探索して行くとき、日本國民の悉くは同血續の民族だと云ふことがわかる同胞とは此處から起つた熟語なのである、然も其の祖先は皆日本帝國を肇め給へる神代の祖先に繋がつて居る、故に後藤新平も山本權兵衛も加藤高明も犬養毅も原も大隈も或は又頭山滿も安田善次郎も大杉君も堺君も賀川君も皆吾等の血縁者であり同胞である他人であつて決して他人ではないのだ。

兄弟は他人の始まりだと云ふことは全く客觀的の名稱に過ぎない大和民族の總

ては決してストレンジャーでもなければ無縁者でもない、此のストレンジャーや無縁者でない人間が豊葦原の瑞穂の國に發足して來たのである、現代人から見れば祖先は或は一徹頑迷固陋者揃ひであつたかも知れない、然し今日歐米の文物を輸入し進歩した科學の力を充分に攝取することを得せしむるに至つたことは頑迷固陋の祖先がよく日本帝國をして外敵の侵略から免がれしめたからである、遠くは弘安の昔近くは明治初頭の歴史を緋いて見ても、これ等の消息はよくわかつて居るのである。

承應の亂以來日本國民はよく内亂を事として來た、否もつと昔の大昔からもそうであつた、然し矢張り其の間に於ても外國の文學や美術を取り入るゝことは決して怠つて居ない、けれ雖今日の如く國家國民の休戚や安寧秩序を亂る様な思想は絶対に輸入されて居ない輸入されて居ても之れをよく排除して來て居るそうして眞に國家を倍養する營養分計りを吸収して來て居るのである。

中には謀叛者もあつたが、それとていつも國家を土臺に働いて來て居る、君臣の分は明かに遵奉し來つて居るのである、彼等には毫も私心がない、一反緩急あれば義勇公に奉ずるの精神を失はなかつた、

故に頑迷固陋必らずしも排除すべきではない、頑迷時にとつては軟派の三省を催がすべき材料になつて來るのである。乍然我等は頑迷と剛健とをはき違へてはならない、そして日本人たる處の生命を完ふせねばならぬ、人智によつてどうすることも出来ない其の生命を信せねばならない耶蘇も云つた如く人間はパンのみのために活くるものではないのだ、日本人は幾何學的直線上に君主と君主に結ばれた我等の心の選擇と成長とを圖つて行かねばならぬ、それが眞實だそれが目的なのである。

第二編 主義者論

一、主義に對する吾人の態度

本編に於ては現代社會の欠陥が産んだ主義者中其の重なるものと目する、堺、
及大杉君の主義の内容と彼等が抱懐する思想の矛盾せる點を指摘しそれに對する
吾人の態度に就て述べて見ようと思ふものである、殊に彼等の思想は悲惨にも物
質主義の現實にのみ専心にして遂に滅亡した獨、露兩國の古い學者の思想其のま
ゝを鵜呑みとして之れを精神的に建國されたる我が帝國の領土に無謀にも實現せ
んことを企て、國民心理の擾亂を敢てせんとしたるは大なる錯誤であつて又如斯
謬見に妄動せんとする同胞を出だすに至つた日本現代社會の欠陥に就ては吾れ人
ともに之れが矯正に意を用ふべきであると信ずるが故に著者は著者の信念を卒直
に披瀝して見ようと思ふ。

二、搾取階級に屬する二人の主義者

堺利彦君にしろ、大杉榮君にしろ姓名通り確かに日本人であり我等が愛する同胞であつて敢て著者が此處に紹介するまでもなく何れも其の事が善か悪かは別問題とするも兎も角ブラツクリストの筆頭に登記された札付の主義者であることは彼等を知れるものには可なりよく知られて來た人物である。

少なくとも日本の思想家達や警察官憲或は彼等を利用して漁夫の利を占めて來た出版屋などの間には前科者、又はプロ文士として知られて來て居ることは事實である。

彼等が斯くまでに名聲を博して來たことは彼等の自己宣傳のために新聞、雜誌其他出版屋などを如何に巧みに利用して來たかと云ふことが大いに與つて力あるものであつた、殊に大杉君の如きは甘糟大尉から絞殺さるる以前に某々出版屋から數千金の前借をして原稿を書く約束までして居たことが判明した程に大資本を

擁する出版屋の信用ある寵兒であつたのである。

彼等は常にそう云ふ大資本家を敵として戦ふことを主義として來て居る、然しながら矢張り資本家から云はせると彼等を上手に利用して來たことになるのである、堺君の如きは現に大倉喜八郎や死んだ安田翁の如き金満家達を痛烈に罵嘲しつけて居る、然し大倉や安田に云はせると「日本には未だ日本のために俺れ達に財産を投げ出させ得る程の傑物が居ない」と慨歎して居るのである、之を見ると未だ嘗て之等の金満家達に對して積極的な戦争を挑んだ模様もないのである、して見ると彼等が當の敵と看做したものは大倉でもなければ安田でもなく、之等よりずつと下級の乙の中處の中産階級に屬するブルジョアの部類の人々中就出版屋やプロレタリア級に屬する我々青年讀書家などが一番手玉に取りよい、そうして一番手頃の戦争相手であつたのである、のみならず彼等以下のプロレタリアの人間共から間接に食つて行くに必要な資本を搾取して來て居る、所謂搾取階級

に属した人物であつたのである。

一〇四

資本家階級、搾取階級、征服階級、支配階級或は権力階級と云ふ様な階級者は彼等の最も憎悪する處のものであり、彼等の猜疑や嫉妬を以て観察し來つた處の階級であつた、之れと反對に被搾取階級であり被征服階級である處の無産者や勞働者などの味方であることを宣傳しながら彼等は其の味方に對して自己宣傳のパンフレットを賣り付けては到底安月給取りなどの及びも付かぬブルジョアの生活を營んで居たのである、そう云ふ様な状態に於ては彼等は自分自身が既にブルジョアとしてプロレタリア階級から觀察されて居ることには毫も氣が付かぬ自己反省心のない實にそうして可愛氣のある主義者共であつたのである。

三、マルクスとクロとは共に唯一のスーパー材料

著者なども明治四十四年から大正二年頃迄の間に丙午社から出された堺君の著

書、「賣文集」「樂天囚人」或はカウツキの「社會主義倫理學」「ルソー傳」「バーナードシヨウ」の「人と超人」の翻譯物など彼れ是れ六、七圓がものは搾取された實にお目出度い一青年であつたのである、大杉君の如きも矢張り多くの著書を出して居る、彼れも亦相當著者の貧弱な財布を箝かせた一人であつた、而して彼等の説はいつもマルサスやダアウキン、マルクス、クロボトキン、ギルド、ホブソン、エンゲルスなどの範圍を出でない毛唐の學說で、學說としても理論としてももろ可なり、世間に讀み古るされたものばかりで何等彼等獨特の發見も主張も大正式な處もない古い思想の承け賣りのみであつたのである、そうして著者などの最も不快に感じたことは彼等の著書のドレを見ても「何々の學說に就ては拙著何々に詳細に之を述べて置いたとか又は本書の末尾に附する處の一論文は愚妻伊藤野枝女が筆に成つたものであると云ふ様なプロバガンダを怠らなかつたことである著者はそうした宣傳によつて間接にも彼等以下のプロレタリア階級から原稿料を

せしめて居る事實に氣が付くと彼等の著書を惜し氣なくズタ／＼に引き割いたり散り紙み代用として糞壺の中に叩き込んで来たのである。

堺君も大杉君も著者などに比べるとつと上等の富裕な善良の家庭に生れて可なりの教育を受けて来て居るのである、だから若しも彼等が両親、祖先の恩愛、日本國民として國法の保護恩澤に浴して来て居ることを今少しく卒直に正直に洞察する處の明があつたならば、彼等は必らずや主義者と云ふ様な狭小な根性を持たずに過ごして来たであらう、そうしてブラックリスト上の人となり前科者としての禮遇を受け得なかつたであらうに、彼等は古いマルクス主義やクロ主義を盲目的に信仰して来たために、恩愛や情義の世の中に育つて来たことが總てブルジョアジの利益のためにばかり育つて来たものだと言ふ様な誤つた極く狭小な信念と偏見とを抱く様になつたものである。

四、主義者の見たる善と惡

然し彼等は斯様な信念を抱くに至つたことを必らずしも正しい善なることだとも信じて居なかつたらしい、現代の社會に於ては善にも二つがあり、惡にも二つがある、プロの善とブルの善とである、我々はプロの善のために戦はねばならぬそして社會はプロ並の人間の寄り集りにせねばならぬと云ふつて居る、若しも社會に善なるものが唯一のものであり最高のものであると考へる學者があるとするならばそれは皆ブルジョアジの學者であつて彼等はブルのために都合のよい事のみを以て善と爲すものであると云つて居る、彼等が斯かる思想を抱くに至つたことに就ては更に後節に述べることにするが少なくとも現代の日本に於て斯かる思想を持つ處の人物を出すに至つたことに就ては政治組織、教育組織或は經濟組織の上に大なる缺陷があつたからではあるまいか、若しも其の缺陷があるものとするならば我々は場合によつては死を屠しても此の缺陷の大修繕に盡さねばなら

ぬそれが國民の義務だと信ずるものである。

一〇八

五、堺利彦の社會觀

堺君は世の中に精神主義なるものは絶対にない。若しあつてもそれは總て物質主義に支配されるものである、物質を除いて精神の存在を認むることは到底不可能である、故に何よりも先づ物質を以て精神を支配させねばならぬ、それが人間社會の本能であり思想の獨立を圖る第一の條件であるとするのである、處でその主義なり主張なりはそれで結構である唯物論者の唯物史觀がそれで立派に成り立つて行くものであるとして置いて、今度は更に唯心論者側の唯心史觀を見るとどうである。

自分達は食はねば死ぬ、死ぬのが厭であるならば働かねばならない、働かねばならぬと考へる其の思想なり觀念なりはいつも自分の肉體を保護する金城鐵壁に

なるのである、換言すると此の金城鐵壁があるがために肉體の安全が續けらるゝ之れは獨り人間斗りではない、總ての動物に就て考へて見ても自己を保護する處の天性を有する其處に動物の眞の本能は精神の働きに支配されて居ることがわかると云ふのである、然し之に對して唯物論者に云はせると我々は五官を持つて居る、此の五官を以て外物を認識する外に認識方法も機關もない、故に五官によつて得られる處の事實以外に事實がありよう筈はない、唯心論者が云ふ様な超自然的の考へ即ち前に云ふ金城鐵壁などは結局此の物質の反映に過ぎない五官を通して得た處の感覺が色々に分解されたり結合されたりするまである、だから精神は根本ではなく、物質が根本でなければならぬ唯心論者は精神で考へることが理想であつて、此の理想を以て物質界の事を處理して行こうとする、其處に理想主義が成立するのであると反駁して居る、社會主義者は將來に對する極端なる社會改造の理想を説いて居るけれども、それは精神主義の支配を受けたものではない此

の理想は物質思想の反映に過ぎぬものだと思ふ、そうしてそれが人間生活の全部であると考へられて居ると云ふのである。

此の論法で行くと人間には道德も何もない、そんな高遠な理想超自然的の信念と云ふものは何も認めることは出来ないと思ふことになるのである。

堺君の主義も亦大體そう云ふ思想から割り出されて居ると思ふ。

六、唯物論者の思想戦

大杉君にした處で矢張り根本の思想に於ては堺君の思想と變つた處はない、然しなら彼等は同じ主義者でありながら常に犬猿も管ならぬ間柄であつた事實を見ると各々主義の上に立論を異にした處があつたかも知れない、以下堺君の主義信念に就て彼れの著書の總てを通じて現はれた處の思想の概括的研究を試み、次に大杉君の主義の相違點を考へて見ようと思ふ、唯此處に特に讀者の注意を願つて

置きたいことは、之れを以て堺君の思想の全部であると早合點をして貰つてはならないことだ、又此の主義思想なるものは堺利彦の新發明にかゝるものでもないことを豫め心得て置いて頂きたいことである。

堺君にしる大杉君にしる殆んど彼等の思想の全部は科學の進歩によつて生み出された歐米人の思想に征服されて、すつかり兜を脱いで終つた、其の降參の悲泣をいつも彼等の職業上から得た独自の新發明品として宣傳して居たまでいあると見て置けばよいと思ふ、

彼等は被征服者の立場にあることを嫌忌する人物だと云ふことは前に説く處によつて大抵想像されたであらうが、精神的にも物質的にも被征服者を嫌ふ處の人物が既にエンゲルスやマルクスの主義に征服されたり、食傷したりして居ることは如何にも滑稽千萬な觀がある、之れを要するに彼等は學者でもなければ又眞の社會學研究者にも非ずして一個の變態心理を有する社會攪亂者であると看做され

ても詮ないことではあるまいか、宗教上に於て弱きものを助けると云ふことがあ
る、けれども主義者がプロを助けよと云ふのとは其の間に物心の相異點があるこ
とを注意せねばならぬ。

七、マルクスは彼れ等の大恩人

堺君がそうした社會主義思想を抱くに至つた原因や動機に就ては別段深く研究
する程の値價もないが、彼れは矢張りブルジョアジーの家に生れ、ブルジョアジ
ーの教育によつて眼界を廣くすることが出来初めた頃には、可なり社會學や經濟
學の書物に親んで居たと云ふことは事實である、而して哲學、宗教等の書物など
も可なり宏く讀んで來たのである、そうして彼れが一人前の人間として一家を構
成して兩親の補育圏外に出された時に自分自身の價値が餘りに社會から少なく見
積もられたり、時に一日の勤勞が一日のパン代にも及ばぬ程の評價をされたりし

て生活上に所謂可なり辛酸な世帯苦勞を味つたことは大底想像も付く、然るに天
は人を殺さぬものと見へて偶々彼れが書物を弄ぶことが好きであつたがために彼
れに相應しい一職業を授けて呉れた、それは例のマルクス論が輸入されて何でも
彼でも人間はパンのために戦はねばならぬと云ふ様な實によい表面唯一主義の教
訓を彼れに與へて呉れたことである、時恰も日本國內の狀況はそう云ふ學説が後
れながら識者間に大なる流行を極めて來た故に彼れは忽ち其の方の熱心な信者に
なつて、只管マルクス研究に没頭した、之れが遂に彼れをして今日の名聲を博す
るに至らしめたものである、で彼れはマルクスを利用して、物質主義の宣傳と云
ふ一職業を發見した僥倖兒と見ることも出来よう、だから彼れの思想なり主義の
根本となつたものはマルクスを除く外に何物もないのである、即ち彼れはマルク
ス宗の極端なる信奉者になつて終つたと云ふても敢て過言ではないのである、だ
から彼れに向つて、精神があつて物質を支配するものだと云ふ様な理想主義の學

説や哲學的的人生觀などを説いて聞かせて見た處で、夫れは到底彼れの信念を動かすに足りない、そうして現今の彼れはもう唯物論者であり、社會主義者と云ふ様な新職業に依つて生活して行くより外に何等法策がなくなつて終つたのである、だから今更彼れに理想主義者になれ、唯心論者に宗旨換へをせよと迫つて見た處で到底駄目な話であり又左様なことを彼れに強要することは却つて彼れに死の宣告を與へ、彼れが覺へ込んだ職業を奪ふ様なものである。

八、國法を無視して命を繋ぐ不埒漢

そこで彼れは現在の職業に熱心でありさへすれば決して喰いはぐれはない、萬一喰ひつばぐれそうな場合には例の通りチョット官費で賄つて貰ふべくなるべく重罪犯人にならない程度で官憲の拍手喝采を博しそうな芝居を演じて見せればそれで一ヶ年なり二ヶ年なりは大丈夫食ひ繼いで行ける、そうして薄暗い獨房の中

で一心不亂に筆の方の内職に精を出せば又夫れで家族共を扶ふに足る丈けの資本金は儲かつて行くと云ふものである、だからちやんと牢屋入りをする前には豫算を組んで置いて之れ丈けあれば大凡出獄の時機までには家族共も安樂に食つて行けると云ふ風に計劃が出来て居る、又萬一の場合のためには妻や娘にも夫れ／＼獨立する丈けの職業が傳授されてあるから決して後顧の憂ひがない、そこで彼等はいつでも監獄入りすることを修養に行くと唱へ大威張りで兵隊が入營でもする時の様な氣分で入獄するのである、實に其の邊の呼吸は巧みなものである、之れが若しも昔の様な封建時代でもあつたならばこんな不埒な手合は一刀兩断にせれる處であつたらうけれども、人權の尊重さるゝ大正の御代に於ては實に難有いことであると云はぬばならぬ。

さあ斯様な主義を職業とする人物が出たと云ふことが、日本帝國のために又日本國民のために、果して善い事か悪い事か喜ぶべきか、悲しむべきか、それは國

法が嚴存する以上、其の國法を通じて観ねばわからぬことであるが、彼れ等の眼中には國法なるものはないのである、國法を犯すことを何とも思つて居ないばかりか、國法はブルジョアジーによつて作られ彼れ等の利益をのみ保護するものである、即ち征服者のための御都合の好いように作られたものであると云ふのである、だから彼等に法の恐威なるものが少しも認められて居ない従つて狂人に近い行爲行動を平氣で演つてのけるのである。

我々は同胞兄弟と共に國家をよりよく發達させるために、國の入費を納めて居る、然も此の入費が年々斯かる亡國的人物を養ふために、其の何分の一かゝ費消されつゝあることを思ふときに、之等主義者なるものが決して吾等の利益や幸福を増進せしむるものでないと云ふことがわかる、と同時に國法の權威をして今少しく峻烈ならしめたいと思ふものである、

彼等は社會觀識の能力は充分に具備して居る様であるけれども、國家觀念に至

つては毫も之を備へて居ない、然しながら社會を改造することが或る場合に國家改良の手段にはなりはせぬかと云ふ様な實に奇怪な玄影を抱いて居る様にも思はれる、マルクスやエンゲルスの學說に心酔せる學者達の間にも往々そうした、謬見に陥つて居るものもある様である。

以下本論に入るとして更に塚の主義の大要に就て述べて見よう。

九、生存無競争の實現運動

一體社會主義者の理想とする處は一切平等と云ふことである、人間が孤獨の生活をして居る時代には平等も何もないが、社會生活をする間には、適者生存、弱肉強食の自然の法則に支配されて行く、此處に必然的に激烈なる競争が行はれて來るものである、

然も其の競争は社會進化の最も必要な要件とされて居る、そこで社會主義者と

しては先づ總ての階級的闘争に打ち勝つて階級の差別を無くして、一切平等の新社會を作り出し、人間社會に於ては全く利害の衝突と云ふことが考へられない様にせねばならぬと云ふのである謂はゞ生存無競争と云ふことにしたのである、

堺の主義も亦大體斯かる思想に囚はれて居る、一切平等の主義は誠に結構千萬な主義であつて恐らく何人と云へども、之れに反對するものはあるまい、然し斯様な思想が根本的に實現されたとしても、人間が際限なき生活慾を十人が十人同じ限度に於て、抑制し得ないことは明かである、夫れでなくても元來が不平等不平均に作られて居る、女子があり男子があり、女の中にも美なるがあり、醜なるがある、男子にも亦、強弱の差があると云ふ、先天的の不平均がある以上、斷じて人爲的の一切平等は望み得ないことである。

一體斯かる思想が何時の頃から流行し出したかと云ふと、それはもう餘程古いことである、然もその根本は現今の社會主義者等が云ふ様な、物質主義とは餘程

縁の遠い學問から生れて來て居るのである、學問は總て眞理を發見することが原則だとされて居る、即ち現實の事實の上から自然の法則を見出したり、或は人生の過去、現在、將來に於ける歴史や成り行きなどを研究するにあつて、其の學者達の態度は常に寢食を忘れて眞剣に精神的（精神的と云ふことは主義者共には認識されない言葉であるが）に考へられ、現實以上の全く超自然的の問題などにも觸れて考察せらるゝ場合がある、然して此の研究はいつも當時の社會と密接な關係を結んで行くのである。

一〇、マルサス、マルクス、ダアウキンの所論とヒント

社會主義思想も亦、學問上から來たもので其の根本とする處のものは、十九世紀の新學問として一般社會にもはやされたダアキンの進化論説が行はれる様になつて、一層に人間の生物社會を見る目が變つて來たのである、尤もダアウキン

以前は、マルクスが現はれて、『人間社會の進化の法則は階級闘争に依る』と云つて居るし、又マルサスも人口論を公表して居る、此のマルサスの人口論に従へば、『動物の繁殖する率と、其の食物の繁殖する率とを比較して見ると、動物の方は非常に高いけれども、食物の方は逆もそれに追つかない、食物は數學級數的に一、二、三、と云ふ順で進んで行くのに、動物は幾何級數的、即ち二匹は四匹となり、十六匹となり、二百五十六匹となる、斯様な繁殖率で進み行く結果、米の様な、食物は幾年ならずして、不足を生ずる、従つて人間社會は、どうしても貧乏にならざるを得ぬ、斯様にして、人間が皆一樣に食物を得ようとして、其の不足して行くものを奪ひあふために、悲惨なる生存競争が行はれるのである』と云ふ説である。

以上二學説はダアウキンの進化論よりもずつと以前に唱へられたものである、然し勿論ダアウキンの進化論なるものは之等の學説にヒントを得て人間の進化の

状態を研究し來つたものであるかも知れないが、兎に角ダアウキンは人間は種から始まつて猿の様な高等動物に進化し其の子孫が人間になるまでには幾十萬年かを経過して來て居る、と云ふのである此の學説はエホバが地球を作つたと云ふキリスト教や其他社會學者や一般生物學者達の間は大分大きい興味を提供したものであつて非常な勢力で全世界に擴まつて行つた、所有人間の所有階級、例へば貴族とか労働者と云ふ様な人々の間にまでも利用され、種々なる議論の種を蒔いたのである、生物學者としてのダアウキンは靜かに生物界の進化變遷の熊形を研究したまで、あつたらうが、之れが恰度維新當時の日本にも輸入されて來て、日本の學者達を喜ばせたことは事實である、堺の如きに云はせると進化論は貴族階級の味方をする學説であつて労働者階級には何等關係のないものだと言つて居るけれども、矢張りマルクス宗の彼れに於てはマルクスと同時に之れを取扱はないわけには行かなかつたと見へて、彼れは彼れの著書（それは何書であつたか記憶

せぬ)の中にダアウキンの説は急激な進化を説くにあらずして、人間の進化が極めて、緩々徐々の中に進むものであると云ふことは多くの場合貴族、資本家などの労働者階級を壓へ付ける武器として用ひられて来たものである、急激なる進化を望む處の労働者階級は常に斯様な武器を以てマアトくと押へ付けられて来て居るのである、そこで學問と云ふ奴は中々當てにならぬし又斯くの如く利用される處から決して學問の獨立などがあろう筈はない、いつも利害の衝突を持つ社會に於ては皆それが、征服者や資本家と云ふ様なブルジョア階級の利益を擁護する武器として使用さるゝに過ぎない、只吾々主義者仲間がダアウキンの進化論に賛成するのは、一は人間の進化であり、一は社會の進化を説く此の進化と云ふ事が全く同一立場にあるからである。と云つて居る、だから彼等の主義は必らずマルクス一天張りだとも云ひ難いが、前にも述べた如く堺一個人としてはマルクス宗が彼れの思想の大半をなして居ると云つてよいのである。

一一、階級闘争とプロの學問

彼れの著「社會主義學說大要」などを見ると、彼れは、どこまでも「マルクス」の所謂階級闘争説は捨てない、そうして此の闘争は飽くまでも急激に社會改造と云ふ旗印を押し立て、戦つて行かねばならぬと考へて居る之れは彼れの現狀に就て考へて見て己むを得ない立場に居る結果でもあろうと察せられる而して、

彼れは其の書の中に曰く、

社會は今猛烈なる階級闘争が行はれて居る(階級闘争、生存競争と云ふことは今更始まつた社會現象でもないが)即ち政治上にも經濟上にも又思想上にも其の事實が現はれて居る、そこで労働階級者は、社會改造運動のために、先づ資本家に對抗する處の學問をせねばならぬ、之れによつてブルジョアの學問と戦つて行かねばならぬ、一體權力階級、支配階級、征服階級と云ふものは、經濟的、政

治的、及び思想的に人民を支配して居る、此の三つの支配形式の中で、其の根本は固より、経済的支配であるが、既に経済的に支配して居る以上は、必ず政治的支配になり、又政治的支配と云ふことは更に進んで思想的支配になるものである、

そこで被征服階級の者は先づ経済的に征服されて貧乏して居る、経済的の獨立がない、

次ぎには政治的に征服されて居る、従つて自由がない、政治上の權利がない、次ぎは思想的に征服せられて居る、従つて獨立の學問をさせられて居ない、學問の機關としては學校がある、けれ共是等の殆んど總ては政府若くはブルジョアジの學校である、新聞紙も大抵金持の所有である、労働階級の爲めには獨立の教育機關と云ふものは殆んどない、詰り支配階級が何時でも智識を獨占して居る労働階級の多數には智識と云ふものがない、支配階級は知識を獨占する結果、あら

ゆる機關を通して自己の階級の利益になる思想を吹込むで居る、社會の輿論なるものはブルジョアジの輿論である、輿論と云ふものは人民多數の唱へる所、多數の賛成する處と云ふことは勿論であるが、其の多數が何に依つてさう云ふ輿論を持たされるかと云ふに、學校、新聞、其他の諸機關に依つてである、そして其の諸機關は皆な政府及びブルジョアジの手の内にあるのである、詰り吾々は皆ブルジョアジのために教育されて居る、だからブルジョアジに反對するには、其の反對する知識がないから非常に困難である、併しそれをやらない限りは今日の無産階級、労働階級が本當に獨立することは到底出來ない、それで何より先づ、自分の利益のために、即ち自分の階級の利益のために戰鬥の武器を造ると云ふ覺悟をしなければならぬ、そして其の戰爭の武器を使用する術を知らねばならぬ、

一一二、之れが本當のサカイ主義

現代に於ては労働者或は下級階級者は被支配階級、被治者階級である以上、之等の人々は自分を支配する學問、自分を壓服する學問を受けて居るのである、それ等の人々は精神主義を奉ずる限り、治者に對する服従を承諾したものである、之を換言すれば、精神主義を奉ずるものは服従満足者である、之等の人々が若し此のブルジョアジーに對して反抗するならば、自分の上の權力に對して戦を挑むならば、何よりも先づ物質を以て精神を支配すると云ふことが必要である、精神主義を捨て、物質主義で行くと云ふことが労働者階級の獨立の第一要件である」と云つて居る、然も之れが無産階級の學問の要旨だと叫んで居るのである、之れを以て堺君の主義の大要は了解されたであらう、之れがホントのサカイ主義と云ふ奴である。

著者は斯様な思想が今日の無産階級者の頭腦に善いこととして理解される、であらうか、否かと云ふことに就ての批評はせぬ、西洋の無産者間には或は斯様な思

想が、そのまゝ通用する、かも知れないが、日本人に於ては如何に貧すればとて鈍すればとて、斯かる思想が受け入れられようとは思はないからである、然し文章や言論の功みなる彼等は、彼等がブルジョアジーに對して不都合だ、間違だ、不正だ、不義だと理窟を云ふ時にも、其の理窟が矢張り敵から教へられた理窟になると心得て居る様に、辻つかりすると彼等の巧言なる手品に瞞着されないと限らぬ、否もう既に瞞着されて居るものもあるかも知れないが、それ等の人々のために、以上の思想に對する、著者の批評を加へて見ようと思ふ。

一三、主義者の仇敵は努力黨

先づ第一に、現今の支配階級と看做さるゝ資本家なるものに就て考へて見る、彼等は果して先祖代々から世襲された富を持繼し來つたものかどうかと云ふことである、中には世襲の富を繼承して來たものもないではなからうが、多くは天秤

俸一本で數萬の富を積んだもの或は夫婦共稼ぎで働きぬいて來たもの、多年の奉公によつて相當の資本を作り出したもの等何れ千辛萬苦、不撓不屈の勤勉努力によつて、幸運にも金持ちの部類、經濟的支配者の地位にまで進んで來たものである。

共產主義者などが云ふ「働かねば食ふことを得ず」處ではない、寧ろ食はずに働いて來たものが可なり多い、然して自分のため、自分の功名のためには殆んど國家國民の安危をさへ顧慮する邊さへもなく奮闘し來れるものがあるとするれば夫等は臆て凋落を見るべきものであると云ふことは歴史に見ても又今回の如き大天災によつて見ても明かに見ることが出来るのである。

一四、共產主義、社會主義者の目標如何

然らば共產主義或は社會主義と云ふものは何を以て目標とするか、彼の露國の

如きは帝政を覆へし、極端なる共產主義によつて改造されたと云ふけれども、現今は其の巨頭と目するレーニンの如きも猛烈なる資本主義者に豹變したではないか、然も社會主義者間に於ては征服者を極度に憎み征服階級者を除くことを以てしたが、辛く其の成功を見るや忽ち治者、被治者の關係生じ主義者の巨頭等數人が天下に合分を下すこととなつて居るではないか、

國內は亂麻と化し人畜を食ふに至つた露國國民は今果して自由平等の權利を認められて居るであらうか、實に塗炭の苦を味つたものは、善良なる露國々民ではなかつたか、

著者の感想を以てすれば現代の金満家、資本家なるものは餘りに物質主義、利己主義個人主義、に趨り過ぎて居る、其の結果として社會に種々なる害毒を散布しつゝあるものが少なくないことは事實である、或は法の蔭に匿れて不正の行爲を働き、或は徳義人道を無視して一攫千金を夢むか如き徒輩が決して絶無だとは

云へない、慈善の行爲を名として寄附金を集め、財團法人を傘に悪事を働き豪奢の生活を營めるものも多々ある、然も之等は其の内容の如何を問はず外觀の如何に依つて政府は相當の補助を給與しつゝある實に馬鹿な話である、如何にも世は鬭争が所有階級に演ぜられ敵も味方も入り亂れて混戦しつゝある此の秋此の機會に際して總て煩はしき世態を打破して眞の改革により、精神的新日本の復興を圖る處の一大責任を負ふものは誰ぞ、云はずも知れた、日本全國民である、國民自覺の精神である、同胞共に相助け相哀れみ、共存共榮の新國民道德を建設するものは實に現代青年の國家的觀念が右すると左するとの一瞬時に繋がつて居ると云つてよいと信ずる、吾々は人と人、或は官と市民そう云ふ様な小部分のことは先づ第二の問題とし、第一に國家の大なるを思はねばならぬと信ずるものである。

一五、大杉の思想と無政府主義

大杉も堺も共に一般のものからは一概に同様の社會主義者視されて居る、然し義等は同じ主義者でありながら、互に犬猿も嘗らぬ間柄であつた事に就ては何等か其の間に主義上の意見が異つて居たに相違ないと云ふことは前にも述べて置いた、それと同時に堺の主義なるものがマルクスから出た經濟的平等説を信仰する一職業者であることをも力説して置いた、權力階級、支配階級、征服階級なるものを平等思想によつて、征服し現社會から、利害關係の衝突の原因を悉く排除せねばならぬ、そうして現に被征服者、被支配階級に居るプロレタリアのために彼等の地位を向上させねばならぬ、戦はねばならぬ、それが現社會組織を改善する唯一の方法だと信じて居るのである、然し大杉の主義は歸納する處結局堺の主義と同一點に到達するけれども兩人共社會を見る目と考へ方とを全然異にした、即ち前者は唯物論一天張りで進まうとする、後者は唯物論に唯心論を多量に含ませる考へて居たのである、堺が經濟的絕對平等の社會を理想として居るのに大杉は

精神的自由の社會を力説する、即ち自由發意による社會平等を實現せしめようとして居たもの、如くである、此の自由意志の發達は總て全社會に強制も壓制もない、平和の社會が現出するであろうと云ふのである、

此の意味に於てプロレタリアを味方として先づ無政府主義の理想を宣傳する、それが、大杉に與へられた天職だと彼れは考へて居た而して最も強硬に自己の自由を主張し來つた従つて、他面から見ると、彼れは非常に強情者であるかの如くであつたが、それは決して彼れ自身の全人格ではなく、彼れも人間として血もあり涙も人一倍に多く持つて居たのである、たゞ餘りに自由主義に走り過ぎたことが時に過激な言動として現はれ社會の安寧公秩を破り國法に觸れざるを得ない場合があつたのである、如斯犯罪者を出すに至つたことは決して日本國家のために名譽だとは云へない。

彼等が自由或は平等の主義が絶対に人間界に容れらるべきであるか否かと云ふ

ことに就て、今少しつきつめて冷靜に考察するの明があつたならば到底それ等主義思想が通用せざるものであることを發見し得たに違いないのである、然るに事そこに出不でずして徒らに泰西思想のみに支配されて、固く社會は斯くあるべきものだと過信し來つて變化變轉極まりなき人間界の歴史や現實の社會觀を忽諸にして、流れ行く自然の風潮に逆行することを企てたことは寧ろ社會に何等の益なく、非常な嫌忌と擯斥とを受けて來た所以であつたのである、人間界の總ての過去の出來事を比較したり推論したりして作り出さるゝ學理や法則と云ふものは絶対に自然を征服するの力とはならない、自然を左右することは出來ないにも不拘、人間が斯かる「アキラメ」根性を持つて生存することは進化を見るの以所でないこと云ふ様な考へから、國禁を犯すことを平氣でやつて居たと云ふことは國民の治安を害すること尠なからず、彼等は遂に天網免れずして、必然の裁きを受けるに至つた、之れは當然すぎる程當然の歸結であつたと云はねばならぬ、然し彼等は如

斯結果を招いたことを以て却つて本懐としたであらう。

一三四

一六、第二國民たるもの覺悟

堺は社會主義者であり日本共產黨員と稱せられ大杉は純然たる自由主義無政主義者であつた而して堺の主義思想は多く獨逸人の學說から出たものであり、大杉の主云は殆んど露國人の思想を承け繼いだものと云つてよい、然も彼れ大杉は死刑囚人幸徳傳次郎等と親交あり同士として今日まで自由の戦ひをやつて來たものであり、又夫れが彼れの一職業と看做されて居たのである、だが吾々青年は此處で考へたい、頭ばかり大きく發達して四肢五官の發達之れに伴はざる現代の有識者、就中自稱藝術家的の人物に特に如斯主義者の言動に迷はされて、不謹慎なる態度に出づるもの、極めて多きに至れるが如きは慨歎限りなき次第であると思ふ。共產主義が流行すると云へば、直ちに何等の分別思慮を廻さずして直ちにルバ

ンカを着用したり、ケマルバシヤが有名になつたと云へばもう直ちに土耳其帽を冠つて見ると云ふ様な日本人の舉措は決して賞讃すべきものではない、雖て全世界の覇權を掌握せんとする第二の日本國民たる現代青年、及第三國民たる日本幼年等は大いに自重自愛して常に善惡の批判を國家の上に判斷し互に相戒めて以て眞に名實共に世界強國の榮位に進まんことを努めねばならぬ、然らずして、現代の如き思想を以て推移せんか遂には祖先の墳墓をさへ守り得ざるに至らんことを恐るゝものである。

一七、ビョトルクロボトキンの經歷

扱て筆端は不思議事に亘つたが、大杉の主義を知らんとするには先づビョトルクロボトキンを知らねばならぬ、クロを知るには何よりも第一に彼れ必生の作だと稱せらる、「相互扶助論」を繕かねばならぬと思ふ、而してクロが「相互扶助論」

を書くまでに至つた経歴を見んには「一革命家の思出」其他彼れが公にせる自叙傳を初め多数の著書中就無政府主義に關する著書を繙かねばならぬ、けれども此處には彼れが無政府主義を抱くに至れる大要を述べて大杉の思想に如何なるヒントを與へたかと云ふ點に就て考へて見る丈けに止めて置く、

クロは十九歳から二十五歳まではシベリヤの一コサツク士官として暮し後に最も強く自由思想の信念を有せしコルサコフ總督の參謀クウケル將軍の副官として露西亞大革命の事業を補佐したのである、然しクウケルの革命事業は遂に失敗に歸し彼れはセントペテルスブルグに送られセント、ビイター、ホオルに幽閉の身となつた、主を喪つたクロはシベリヤに漂浪の身となり、つぐさに社會苦を味つた、そうして彼れは次の様な社會觀を抱く様になつたのである、

「農奴使用者の家に育つた私は、當時の有ゆる、青年と同じく指揮や命令や叱責や懲罪などの必要といふ事を信じ切つて實際生活にはいつた、しかし私は種々

種々なる大事業を取扱ひ、又多くの人間と交渉するに及んで、命令や法律の原則の上に行動するのと御互の理解を原則として行動するのとの差異が分り出して來た、前者は軍隊の檢閲などには立派に役に立つ、しかし實生活の事にかけては、そして其の目的が多くの輻合意志の嚴格な努力を通じてのみ達せらるゝところでは何の値打ちもない、斯くて私はシベリアで從來抱いて居た國家的規律の信仰を全く失つて了つた、即ち當時私は既に無政府主義者となるべく、準備されて居たのである、(クロ自叙傳第三章參照)といつて居る、然してクロが何故に斯かる思想を持つに至つたかに就ては全く窺知することを得ないけれども、彼れが斯かる社會觀を抱いたことは當時の露國の國家組織制度が專制的であつたことにクロ自身の先天的強烈なる感情が加はつて之に反逆すべき社會哲學とでもいふべきものを直ちに自由の基調の上に理屈づけて行つたのである、

即ちそれは、人間個性の尊重といふことである、そうして其の各個性の自由な

る合意、自由なる團結、自由と平等と友愛とを彼れの基調とし憧憬した、そうして彼れは遂に其の自由の個性を強烈に主張し、ロシア或はフランス等に於てまでも投獄の浮目を見るに至つたが常に彼の相手とする處のものは自由を束縛する處の有形無形の社會組織であつたために何より手近に體驗する政府に向つて弓を引いたのである、然して投獄の身となつても彼れは「監獄論」或は「無政府主義論」、「無政府主義の道德」、「謀叛人」、「無政府主義の基礎と主張」或は無政府主義の哲學と理想」といふ様な著書を出し、之等の著書をするには必らず彼れの妻女の助力を受けたのである、彼れが謀叛人を書ける時代の自叙傳によると、「妻はいつも私と有らゆる出來事や問題に就て議論をし、且つ私の文章の嚴格な文學的批評をしてくれた、其の中の「青年に訴ふ」の如きは、有らゆる國語に翻譯されて數十萬部も擴がつた、實際私は妻に負ふ處が多かつた」と云ふ様なことを書いて居る、而して彼れはシベリヤ漂流時代から地理、物理數學、動植物學などに深

い造詣があつたので無政府主義を生物學に結び付けて行つて相互扶助論を作り上げた、彼れの相互扶助論なるものは、之を別つて「動物界の相互扶助」「蒙昧人の相互扶助」「野蠻人の相互扶助」「中世都市の相互扶助」「近代社會の相互扶助」此の五篇より成つて居るが「近代社會は動物界の相互扶助の有様と全く同じ様な態形に置かねばならぬ、それが彼れの主義の理想境であるのである、然らば其の動物界の「相互扶助」なるものに就て彼れは如何なる觀察を下したか、曰く

一八、クロの相互扶助論

蟻の巢を取つて其の生活状態を見るに、多くの著書に記されてゐる事實、即ち食物の運搬や住居の建築や、子孫の育成や、蛾蟲の飼養やその他萬端の仕事が何れも他人の指揮や命令を待つ事のない、任意的相互扶助、の原則の下に行はれてゐる、そればかりではない、蟻の多くの種族では各々の蟻が互に食物を分け合は

なければならぬと云ふ事が、その社會の最も重要な義務となつてゐる、それも倉に貯へてある食物や道で捨てた餌を分け合ふばかりではない、誰れでも其の仲間のものから食物を乞はれた場合には、自分が飲み込んで既に半消化されてゐる食物をすら、何時でも吐き出して分けて遣らなければならぬ事になつて居る。

相異なる種の蟻、若くは平素仇同士の巢に屬する二疋の蟻が、偶々途中で出遭つた時には互に道を避けて近づかないやうにする、これに反して、同じ巢又は同じ殖民團體の蟻が道で遭へば、互に相近づいて、暫らく其の觸鬚を揺動かして挨拶をする、そして其の何れか、餓えてゐて他の一方が満腹してゐれば、餓えてゐる方の蟻は直ちに食物を要求する、その時に食物を要求された方の蟻は決して此の要求を拒むやうな事をしない、直ぐ口を開けて身構をする、やがて透き通つた一滴の液體を吐き出す、そしてそれを其の仲間の蟻に甜めさせる、これはフォレルが発見した事實であるが、この消化した食物を吐き出して仲間と與へると云ふ

事は蟻の社會の最も重要な一現象で、しかも稀れに起る珍奇な事實ではなく、餓え渴えた仲間を救済し又幼蟲を養育するのに常に行はれてゐるのである、そして十分満腹してゐながら仲間の救済を拒むやうな利己的な奴がある時には、仲間は其の蟻を敵として若くは敵以上の敵として取扱ふ、殊にそれが他の種との戦争の際中でもあれば敵に向つてゐた、仲間等は直ちに踵を回へして、敵に對するよりも更に猛烈に此の貧慾ものを攻撃する、又敵種の蟻に食物を分けて遣る程の狭氣のある蟻は、其の敵から親友として待遇される、これ等の事實はフォレルやユウベルなどの最も精確な觀察と周到な實驗との結果最早少しも疑ふ餘地はない、蟻は一千種以上もあつて、ブラジルなどではこの國は人間のものではなく蟻のものだと云はれてゐる程、繁殖の盛んな動物である、けれども同じ巢又は同じ殖民團體の間には、所謂生存競争を少しも見出す事が出来ない、尤も異なる種の間には激烈なる戦争が行はれ又斯かる戦争には随分殘虐な行爲も見出される、(讀

者の注意を乞ふべき點は生存競争と無政府主義との關係に對する深き研究と理解である、しかし一社會の間には、相互扶助、犠牲、献身等の道德が、其社會の動かす可からざる條規となつてゐる、白蟻や黒蟻は所謂生存競争を努めて排斥してゐるのであるが、彼等が自然界の優者となつたのも實はその爲めなのである。蟻の勢力の優れてゐる事は、その巢を一見した丈けでも分る、彼等の巢の精巧な事實に驚くべきものである、其の建築物は身體に相應じて見れば、吾々人間の石造や煉瓦造の大厦高樓よりも遙かに宏大である敷石をした其の道路、圓天井を張つた地下室、大廣間穀物庫、何れも皆吾々の驚嘆に値しないものはない、又蟻は農業までも營んでゐる、現に穀類の畑を持つてゐて、時々々の收穫やら、芽麥の製造などに従事してゐる、卵や幼蟲を育てるにも、一定の合理的方法により、又幼蟲を育てるにも、特別の室を設けてゐる、蟻の勇氣と膽力とはこれ等の優秀な智力と等しく何人にも稱讚の辭を惜ましめない、そして之等の力はすべて彼等が

其の刻苦勤勉の生活に於て實行する相互扶助の自然の結果である、と云つて居る而して大杉は更に斯ふ云つて居る、この相互扶助の生活を營んである結果として蟻の社會には今一つ著しい特徴がある、即ち各個體の間に、自由發意心が驚くべく發達して居る事である、相互扶助は勇氣振興の第一條件たる相互信頼となる、そして又この自由發意心は勢力發達の第一條件である、この二つの精神が動物界にも人類社會にも相互闘争よりも遙かに重要な進化の要素なのである、古い學者等は蟻の社會に帝王のある事や女王のある事や、全體の仕事を指揮命令するものがある、と云ふ様な事を説いてゐた、けれどもユウベルやフォレルなどの久しい歲月に亘る細密な觀察が公にされてからは、この説が轉覆されて、蟻は他の權力命令によつて動いてゐるものではない、社會全體の幸福の爲めに銘々がその事に當ると云ふ自由な任意の行動をしてゐる事が明白になつた、特に人間の社會では權力命令の是非とも必要だと云はれて居る戦争ですらも、蟻の間では矢張り此の自

由發意の原則によつて行はれてゐる、何等他人の意志權力の交渉を受けないで、只た萬事を各個人の自由合意と自由發意とによつて處理すると云ふではないか、僕（大杉）は此の暗示に富んだ蟻の社會生活を以てクロボトキンの著書に記された動物界の相互扶助を代表させると同時に、更に讀者君諸と共に、吾々自身の生活してゐる人類社會の生活を反省したい、僕は先きに「この本能の發達に最も都合の悪い状態の下にある今日」と云つた、けれども此の今日の社會に於ても吾々自身の生活に顧みて、相互闘争によつて得る所よりも相互扶助によつて得る所の遙かに多い事が直ぐ分る、そして猶吾々は所謂「生存競争の最も激烈なる今日の社會」の爲めにどれ程惱まされ苦しめられてゐるか知れない、と云つて居る。

一九、大杉とクロと蟻の社會

大杉は此のクロボトキンの蟻の社會を此上もない名著だとして夫れを信じ夫れ

を實現すべく努力することを現代人に宣傳したのである、而して彼れの著書の如何なるものを見てもクロの思想を説いて居ないものはないのであるが、かれにもクロにも蟻の生活が彼等の研究せんとする處、言はんとする處に最も適當なる状態のみを摘出することに努め、其の他の蟻の社會に於ける缺點や争闘や同族相喰める事實等に就ては一向無頓着に見通して來たのである、如何にも蟻は忠實勤勉な動物であるけれども大杉等が見た様な美はしい點ばかりでもなく又彼等が最も嫌つた處の生存競争と云ふことを深か入りして論述すると彼等の主義と衝突することになるので之れは避けられる限り避けてアリ難くもない、御都合のよい理屈のみを書き立て、來たのである、そう云ふことが前項の蟻の實例の中丈けにでも充分に現はれて居る、勿論大杉の思想は如斯單純な原理ばかりから割り出されたものでないことは明かである、けれども其の根本とする處はそうした人間界の相互扶助を蟻同程度にまで實現させて見たいと云ふことは彼れ唯一の理想として居た

ことで又、そうした學問をビョトルクロボトキンから學んだと云ふことも争はれない事實なのである、クロは十五歳の當時より他人に反抗する處の強情性を備へて居た、そうして他人の云ひ付けや長幼の序と云ふ様なことはかれには寸毫も見られない程に自儘まゝな育ち方をして來たものである、之れは前に記したかれが自叙傳の一節に見ても明かである、

大杉も亦クロと殆んど似寄つた性質の人物であつたと同時にかれの經歷もクロに髣髴するものがある、之れは大杉其の者がクロの眞似をして來たのかも知れないがクロが軍人であつたこと、囚人生活をしたこと、文學を好んだこと、妻女に助けられて來たこと、或は佛蘭西に行つて無政府主義の演説をやつた様なことは殆んどクロと寸分の違いなくやつて來て居るのである。

二〇、道德と成文法の權威

人知未開の時代に於ける社會には法なるものはなかつた、然し法がなくとも人間には人間として實踐すべき立派な不文の法が與へられて居る、即ち道德が夫れである、而して此の道德を無視し、此の不文の法を破るものは自ら亡び、他からも亦打ち亡ぼされることを餘儀なくされて來たことは史實に明かである、故なく人を殺す行爲は道德上の最も憎むべき罪惡であつて、此の犯罪者を活かし置くことは社會を紊るものとして他の強力なる力によつて亡ぼされ、刹戮せられて來たものである烏合の衆の個人間に於ても此の事はよく實行されて來て居る、そしてそう云ふ道德心が未開の人間社會にも在つたから、人間は其の種族を今日にまで永續し來たることが出來たのである、故に道德は之を卒直にいふならば、人種永續のために天が與へた法律であつて、之を其の時代時代の人間が曲けることは許されないのである、而して個人が集つて群團的生活に入る様になり、又群團が集まつて一定の土地を占有する様になれば道德の解釋も結局六ヶ敷いことになり其

の遵奉すべき方法や実践の手段も亦大いに變遷して來る、けれども道德の大義は依然として何等變化はない、人の據るべき道、人の踏み行ふべき法律であることには少しの變動もないのである、更に群團、土地、及群團の統御組織が必要になつて來ると此處に種々なる、面倒が起つて來て、そうした不文の法律だけでは到底満足が出来なくなつて來る此處に於て道德の分家たる成文法の必要が生ずるわけである、國家と國家の間の道德にも亦分家の力を借らねばならなくなつて來る之れが憲法や國際法の如き法律の出來た起因である、

故に法律の精神としては毫も道德に反するものであつてはならない筈である、然るに道德なるものは今日の社會には何等の權威をもたぬものだと言ふされて居る、少なくとも法律學者間に於ても左様な考へを持たれて居るのである、即ち人を殺したとて本家の道德の制裁は受けないが、分家の法律が之を罰する、そこに法の權威があるといふのである、

二一、法律の缺陷と道德の缺陷

そつといふ信念が強くと人々の間に蟠居する様になつたために、法を犯さざる限り道德に背くことは敢て差支ないといふのである、敢て差支あらしめるためには年々法の力の及ぶ範圍を擴張して本家の力に一致する様に法文の改正を行はねばならぬ、然しながら法其のものは人の手によつて作らるる議會が作るものであつて、微妙なる道德不文の法の作用の動きにまで及んで之れを條文に現はすといふことは到底不可能事とされて居る、之れ法の不備法の缺陷ある以所である、現代に於ては法にのみ人の行爲の總てを委せ過ぎる傾向が多く従つて、法律上に明文がない事柄であつたならばたとへ他人を害し、國家を毒することが明かであつても自己一身の利益のために敢て他を顧慮せずして不徳行爲を動くのである然し法の力を以ては之れを如何ともなし難い、人智が開けて行くに従つて法の網を潜つてド

シ、背徳の行爲も行はれて行く、彼の密賣淫の如きはその一例であらうと思ふ、元來賣姪なるものは道徳があつて今日まで人間の種族が永續して居るといふ點からいふとどうしても之れが廢止撲滅を期せねばならぬ、然しながら宗教や教育するも何等の價値を有せぬ今日では之が撲滅を圖ることは到底不可能である、そこで道徳には反するが己むなく法律を以て公賣姪なるものが認めらるゝことになつて居る、密賣姪は許さぬが國家に税金を納めさへすれば何憚る所なく天下御免で姪を賣ることが出来るのである、之れは法の眞精神からいふと高い税金を徴することによつて賣姪防止の手段とし、又他面色慾から來る所の種々なる犯罪行爲を制御する意味であつて、道徳破壊の行爲であることは明かであつても國家の収入を増すこと、他面さういふ利益があるといふので、斯様な本家の道徳を無視する様な公娼制度といふものが認められたのである、如斯して分家が本家を凌駕すると云ふ奇怪な現象が現はれた、本家である道徳の力は形似上絶對的制裁力がないと云ふことが人間の本意本志に反する矛盾の行爲を無遠慮に實行させることになつて終つたのである。

二三、賣姪制度は社會の缺陷

以上は主觀的道徳觀上からの考へ方であるが今度は之れを客觀的に考へて見る、と賣春婦其の者は多くは、不幸なる物質慾の犠牲者であつて自ら賣姪を希望するものは餘程の色情狂者にあらざる限り、如斯屈辱的行爲を敢てするものではないのである、即ち父兄の負債の形に取られ、母弟の生活難を救ふため悲惨の境地に沈倫し遂に身を賣つて之を救ふと云ふ様なのが非常に多い様である、して見るとさうした婦人は親孝行者かさもなくば一家を救ふと云ふ立派な義狭心を表現して居るものであつて、又之れを買ふ者も其の義狭者に同情する一人と目することが

出来るかも知れない、然し之れを國家大極の上より見るときはそれが決して善良なることだとは断定し難いのは事實である賣姪の婦女が婦人としての天職を全ふすること能はずして空しく青春期を終るものが多い事實があり、又病毒傳播の媒介物である以上國家を毒するものであることは明かである之をもし許さねばならぬ社會——宗教や教育の力が如何にすればとて其の効効が望まれようか——近來廢娼デーと云ふものが高島平三郎先生や石本男爵夫人等によつて東京市に行はれて復興議會にまで提案された、先生方の計劃は公娼制度廢止賛成者の署名を乞ふて、之を一部國民の輿論として年々議會に提出し、公娼賣姪制度を打破し様と云ふのであつて、誠に結構な企てである、然し其の成績を見ると東京全人口の九牛の一毛にも當らぬ署名者であつたのであつて此の九牛の一毛の署名者悉くが果して真心から賣姪不賛成者であつたか否かと云ふことは誠に疑問とせざるを得ないのである、著者は思ふ、此の様な計劃は誠に結構なことではあるが、公娼を廢止

することが他面密淫賣者を増加せしむることにならぬか、天保年間に水野忠邦が私娼禁制の札を立て、却つて其の猥厭を極めた事實もある、最近警視廳に於て行はれた密賣淫者の檢舉が却つて郡部に其の反影を與へつゝあることを見ても、公の強力によつて人爲的に防壓することは全部に於て大なる効果を見ること能はずして却つて廢止區域に亂倫の犯罪者を産むが如き現象を見るに至らざるかを考慮の中に加へねばならぬことだと信ずる、公娼廢止デー及密賣婦檢舉の如きは勿論やらぬより増しであるが其の結果が無益徒勞に終るものである幾多の經驗と歴史とを有する以上寧ろ如斯一時的の防止策を講せんより、退いて國民教育の徹底普及及道徳的精神善導の方策に積極的なるを以て先決問題となすべく、又之れを以て公娼廢止上の第一階梯たらしむることに盡力すべきだと信ずるものである、然も今日に於ては宗教家も教育家も肉體慾の前には何等の價値を認め得ず、又價値あらしむる様な偉人も仙人も出ないとするならば如何なる方策を以て之等矛盾撞著

の社會を救ふべきか、之れ吾人の深慮を要す點であらねばならぬ。

一五四

二三、社會改良は國家觀念の新道德を以てせよ

議論が此處まで進むとき吾々は吾々を道德的に覺醒せしむるものは、たゞ吾々自身の良心の外に何物も信頼するものがないと思ふ、

即ち國家觀念の基礎の上に吾々の良心を建設し其の良心を常に道德的善良なる行爲の上に現はして行かねばならぬ、此處に精神修養人格陶冶の必要を認めるものである、乍然人間群團的生活圏内に於ては法律の必要なるが如く個人の良心の發露は必らずしも善良ならざる場合がある、故に之れが指導と訓練とには日本國民競つて互助の精神を持つて進まねばならぬ吾々が精神革命の必要を叫ぶ以所も實に此處にあるのである

畏くも 天皇陛下は現代の風潮を軫念あらせられ精神作興の詔を下し賜はつた、

吾等陛下の赤子は何を以て聖慮に應へ奉るべきか、即ち吾々は國家のために善良なる目的を選び其の成否を圖つて行かねばならぬ、吾々が『良心』と稱する處のものは此處を云ふのである、

如斯實際は道德なるものも人々の考へ方や見方の如何によつて善ともなり、惡ともなるものであるか、人の善なる心理はたゞ一つである正しいものである、毫も二重になつたり三角になつたりするものではないのである、吾々の道德はいつでも夫れが國家のために正しい道德であり、同胞のために善なる道德であらしめたいのである。

二四、道德心の發達は法律を無用に歸す

國家は法があつての國家であり、法は道德があつての法である、然も法なるものには大なる缺陷、大なる不備を有するものである以上吾々は道德と法とを分離

して考ふることが出来ない、吾々は寧ろ或る場合には法より道德に重きを置くことを國家の眞髓と信じ、國家存立の要素とせねばならぬ法治國に於ては法を以て國家最高の權威とするけれども、法があつて國家が産れたものではない、法律學者の云ふ國家なるものは法理上の國家であつて、眞の國家は國體創始と同時若しくは土地人類、道德の三要素が群團人類の間に認識せられた大古の時代から存在するものであつて法があつて國家があると云ふ思想は道德の發達したる人類社會より見せしむるときは最も野蠻な説であらうと信ずる、

道德を基礎とする人心の發達、智育の啓發が完境に進んだなら偏主義者の如き一種の畸形兒を見ることもなく毫も法の必要を見ないであらう、人心は此の境地にまで進むことを理想とせねばならぬ、吾々の理想はそこにあるのである、以上の意見よりすれば國法は國家に害毒を及ぼすものを除く唯一の武器としてののみ有効にして、私人の權利義務及公私の利益は單に道德によつてのみ保護強制せらる

ゝものでなければならぬ、然るに道德は人の行爲の上に何等制裁力なきが故に法の力に依つてのみ生活せんとするが如き狹隘なる社會に偉人國士が出づべき道理がない、のみならず善良なる道德心の發露は法の範圍に於て制限せられ、絶対に抑壓すべき不道德の行爲行動は却つて法の制限を摩犯せんとするまでに進み來り、法律上罪惡の境界は全く間髪を容れざる間にまで置かるゝに至つて居るのである、

日本は法治國である、法治國であるが故に人民が法を守るべきことは當然であつて寸毫も法の尊嚴を犯すべきでない、然しながら日本の母法たる憲法が布かれて日尙淺く僅かに三十有六年に過ぎずと雖も物質文明は浸々として輸入せられ法之れに伴はざるを常態として居る故に法は物質觀念に蹂躪せられ、道德も亦物慾の奔弄する處となり、彼の所得税を誤魔化さんかために會社組織を變更したり相續税を免れんがために申告を偽り、國民としての義務を履行せざらんことに努

めて以て、他面自己一人の物慾の満足と享樂とに耽らんがために、妾を貯へ實質上一夫一婦の禁制を犯し恬として怪まぬばかりか、却つて之を以て男子の跨りとするが如き不埒漢が上流顯官の間に横行しつゝあるが如き、吾々現代青年の見て以て大いに憤慨禁する能はざるものである、

嗚呼我か三千年來の國光は如斯道徳及法律觀念の頽廢によつて亡び行かんとするか。

二五、物質文明は國史も法も蹂躪す

物質文明は人を殺するに非ず、國を亡ぼさんとす、盛者必滅の世とは云へ、僅かに五十年の全盛を以てして剛氣潑刺たる明治時代の國民精神は今や全く其の影を薄くし、文弱隋輩の徒によつて先づ忘れられんとしつゝあるのである、

明治の中葉より、大正の今日に臨む處の吾々現代青年は國法を作るに至れる維

新當時の志々の活躍苦心の俛を偲び、大正の時勢を鑑みて以て精神大革命の事業を完成すべきである、著者は此の時代に如斯威を抱くに至れることを歎くものである、

二六、ナショナルトレイツの哀亡

回顧するに我か日本帝國々民は他の追従を許さぬナショナルトレイツを持つて居たものである、彼の四十七士が主君の仇を討つた如き、乃木將軍が殉死を遂げ又沖、横川の二勇士が日露の國交破るもや、二月の嚴寒肌を刺す北滿の朔風を物ともせず支那土人に變裝して北京より哈爾濱に歩行し旅順に連なる東清鐵道のヤール河鐵橋破壊を企て、成らず無慘なる敵手に慘刺された如き、勇壯義烈な性質は殆んど全日本人の特有性とされて居た、然し此の國粹的精神は今や軟弱なる一部國民の間には之れを排斥すべきことだとさへ罵られつゝある、明治二十七八年

同三十七八年、大正三四年事件前後に於ては我國民の上下悉く武勇なる出征軍人の間に、そうしたナショナルトレイツの歴史が幾百千となく跡されたことを以て大なる誇りとした彼の一嗷呖手、白上源次郎がこと、玄武門の勇士原山重吉の歌なども未だ吾々の耳朵には物新らしく残つて居る、「煙も見えず雲もなく風も起らず波立たず」と勇敢なる水兵の歌も忘れはせぬ、日清戦争の勝利が産んだ勇ましい軍歌である、櫻井、廣瀬、橘、山田等の佐尉官處から東郷、乃木、野津、大山、河村、黒木、兒玉、山縣、奥、品川、神尾、明石、の諸將軍處まで、何れ赫々の武勳者ならざるなく、之等の人々は或は武士道の權化であり護國の神として當時の國民には崇拜せられ、事實に於て之等の人々の肉や血によつて日本は遂に世界三大國の一に列するの國運を見た、然るに之等の歴史は今や歐米思想の輸入によつて人々の間には却つてそれを軍國主義だ、ミタリズムの歴史だと云ふ様な史實抹殺的思想を透して輕蔑視する様な傾向をさへ現はれて來て居る、從つ

て武道尙武と云ふ様な日本人の國民性は大半消滅し掛つて之れに代ふるにダンスボール、ゴルフ、ラグビーと云ふ様な運動競戯が流行し、擊劍、や弓術などまでが左様な運動競戯と混同視されて、擊劍よりも角力よりも、ボールやピンポンが面白いと云ふ風に變つて來た、成程そうした西洋の運動にも確かに良い處もある團體的に輸贏を決することは確かに學ぶべきものでもあるが。

二七、我が國技は精神の鍛練にあり

我國の劍道、弓術は精神の鍛練にあるのであつて彼等と同一の論ではない、竹刀の尖先を睨んで敵の虚を突く、或は臍下膽田に渾身の力を罩めて姿勢を正し、矢尾を睨んで的を射る、其の術の達する處には萬夫も當り難い大和魂が動めいて居る、然るに之等の精神によつて鍛へられ、又鍛へ上げて行かねばならぬ、日本國民性が日々に廢れて行つて、尙武會、武德會などか淋びれてダンスやピンポン

などが若い學生や紳士淑女の間に喜ばれ、昔の武士道も婦道もなく果ては數年前まで軍人萬歳を叫んだ國民が、軍人をさへ見れば異國民にでも接する様な態度を取る様な世の中になつて來たことは保守的な人間でなくとも慨歎せずには居られまいと思ふ、

二八、世界の**大勢**と**保守的思想**の必要

若しそれ、世界の**大勢**より見るならば我が國民は必らずさうして保守的思想に目醒めざるを得なくなるであろうと思ふ、ミタリズム、軍國主義が今や世界の何れを見ても恐ろしい勢力を以て復活して來たことを注目せずには居られまい、ワシントン會議によつて眞の平和が齎らされんことは日本國民の熱望する處であつた然るに事實は全く裏切られて、米國自身に於てさへ着々として平和を破る様な軍備が施されつゝあるのである、

二九、ミタリズムと世界各國

即ち華府會議後同國に設置された、米國軍港整理調査委員會はワットマン提督を委員長として次の様な計劃を決定したのである

桑港、ビューゼットサンド、ノーフォーク、ナランセットを軍港として整理し殊に桑港は米國全艦隊を收容する程度に擴張すること、マユラ、キイウエスト、チャールストン、アラスカ、サンデヤゴを海軍要港とし希哇、巴、蔡、馬、仁、艦の前進根據地を置き最新設備を施すことに決したのである。

無論米國と雖華府會議によつて締結せられた海軍條約の比率五、五、三の比例を保つためには廢艦の整理は着々進めて居るに違いないが、補助艦船の建造に關しては何等の制限がなかつたことを唯一の理由として、今やゲトロイト級の巡洋艦(七千五百噸三十三節)凡隻の建造を急ぎつゝあるではないか、而して米國海軍

省内に於ては五、五、三の比率丈では甚だ心細いによつて一億一千萬弗の豫算を以て太平洋の防備を堅實にしては如何と云ふ様な議論さへも起つて居る、海軍條約の効力の發生は明かに米國海軍の大平洋岸戰略上に一大變化を齎らした、而して米國の銳利なる鎗の穂先はドコを向いて光つて來たか、又露西亞の南下が大恐威とされて居た英國に於ては今や露國軍國主義の滅亡によつて印度、非洲の安全を知るに至るや弊履を捨てて如く日英同盟の約を捨て、尙其の上に華府會議の精神に反し壹千萬ポンドの大資本を投じて新嘉波に、桑港に劣らぬ一大軍港を造築することを決し、世界の視聽を驚かした然も英領加奈陀には我々同胞に最も關係深き東洋人の排斥が峻烈に行はれ、濠洲には白漆主義が唱へられつゝある佛國は既に壹千五百臺の精銳なる軍用飛行機を有し世界第一の航空軍を有するに不拘尙且つ二億二千萬法の航空軍事費を可決し、英國との權衡を保つことに努めて居る、佛のルール地方占領はいふ丈け野暮なミリタリズムの發揮である。

和蘭女皇國も亦南洋に三億ギルダの軍港を置かんとして居る、斯くの如くして國際聯盟、平和會議も名のみであつて何等世界平和の保證とはならない空條約になつて終つて居るのである、世界の軍備は今や東洋へ東洋へと移り世界の大勢は全く群雄割據の有様にある、まかり間違へば日本などは一つたまりもなく叩き潰されそうな形勢になつて來て居る、更に又驚くべきことは。

三〇、米露兩大陸の接續と日本

米國に於てはアラスカのプリンス、オブ、ウエールズ附近からベーリング海峡下に海底鐵道を設け、西伯利亞のセントローレンスに出でスタノヴゴイ山脈の東麓を走り黒龍江州のポチカレーウオー又はブラゴエシチエンスクに出る西伯利亞東鐵道を布設して豊富なる露國の物資を陸續きに米大陸へ運ぶ處の計劃さへも出來て居るといふことである、